

けやき棟開設10周年記念

筑波大学附属病院

University of Tsukuba Hospital

アート

&

デザイン

の

歩み

History of Art & Design

けやき棟開設10周年記念

筑波大学附属病院

University of Tsukuba Hospital

アート & デザイン の 歩み

History of Art & Design





はじめに

筑波大学附属病院は、茨城県唯一の特定機能病院であり、医育養成機関として茨城県の医学教育・医療の発展に貢献するとともに、高度救命救急センターや災害拠点病院など様々な拠点病院の指定を受け、茨城県の医療の最後の砦としての使命を担っております。

私が2018年に筑波大学附属病院長を拝命して以降、特定機能病院としての真の機能強化を目指し、「マグネットホスピタル」をコンセプトとした病院運営に取り組んでまいりました。マグネットホスピタルとは、患者さんや医療者の満足する環境で良質な医療を提供する魅力的な病院のことです。

本院の理念には「良質な医療を提供する」ことを掲げており、筑波大学の強みでもある芸術系の教職員とも連携し、けやき棟開院以前から20年以上も、アートの視点からの診療環境の充実を試みてきました。今では、病院施設内外へのアートの展示にとどまらず、患者さんと直に触れ合うワークショップの開催や病院職員との連携による作品制作・展示、病院主催イベント等へのアートによる支援など、様々なアート活動の場として本院も本格的にかかわるようになりました。これは病院再開発事業のスタートシンボルとなった、けやき棟の完成からのように思います。

病院のアートが一つの芸術、学芸として認知、評価されるようになったのも最近になってのことかもしれません。筑波大学附属病院けやき棟10周年記念の本書発行に至るまで、これまで長く本院のアートにかかわり、彩りを与えてくださった多くの方々に感謝し、また自身も現病院長としてかかわれたことをとても光栄に思います。

けやき棟は、お陰様で2022年12月26日に開設10周年を迎えることとなり、シンポジウムが盛大に開催できましたこと大変喜ばしく思っております。

現在改修中の病棟B棟も2024年8月には供用開始予定であり、そこには新たに小児病棟、増設するバースセンターが加わります。病院のアートが更なるステージに移行・発展し、筑波大学附属病院が目指すマグネットホスピタルの実現に向けた未来への推進力になることを切に願っております。

原 晃
筑波大学副学長／理事／附属病院長



療養環境の改善をめざして

筑波大学は、基礎学問をはじめ体育・芸術など幅広い分野の教育研究組織をもつ総合大学であり、特に芸術、医学、附属病院を備える国立大学では日本唯一です。こうした特性を活かして芸術組織では、療養環境の改善を目的として附属病院と協働で様々な実践と研究を進めてきました。現在、両組織で運営している「病院のアートを育てる会議」では、芸術系からデザイン、芸術支援、洋画、彫塑、書、構成、総合造形などの研究領域の教員と指導学生が関わり、病院の医師や看護師に限らず多くの職種の職員が連携しています。

こうした取り組みは2002年から始まりました。大学の演習科目であるデザイン演習やつくばユニバーサルデザイン研究会を通じて附属病院で取り組みました。2005年からは大学院との共通科目「大学を開くアート・デザインプロデュース(adp)」の一環で生まれた学生チームが活動を開始しました。そして2012年完成のけやき棟竣工時には、芸術系の複数の教員や学生がアートワークや展示に携わり、2013年度から2015年度にかけては文化庁の助成によるアートマネジメント人材の育成事業を行なってきました。これらの実践の場では多くの学生が参画し、卒業後はその経験をもとに各領域で活躍しています。2013年度からは本学の卒業生が附属病院のアートコーディネーターとして、院内のアートマネジメントも担っています。さらに教育研究活動として実施してきた本活動を社会に普及すべく2017年には芸術系教員や卒業生、病院関係者らによってNPO法人が設立されました。

アート&デザインは医療環境の改善における有効な手段の一つです。その取り組みは患者さんの心身のケアに効果をもたらすばかりではなく、患者と家族、医師や看護師をはじめ病院職員を含む関係者間のコミュニケーションを促進する効果が見込まれます。

今後もさらなる取り組みの展開を図りたいと考えています。引き続きご指導、ご支援を賜りたく、お願い申し上げます。

野中勝利
筑波大学芸術系長





本書は、筑波大学附属病院けやき棟の開設10年を記念し、2022年に行った「ボタニカルホスピタル けやきの森にあつまるいのち」を記録し、新たにコラムや年表などを掲載したものです。

無機質になりがちな療養環境が人間性に寄り添うものとなることを目指し、2002年にスタートしたアート&デザインの活動。約20年を振り返るシンポジウムと、「植物」と「生態系」をテーマにした企画展を開催しました。

けやき棟開設10周年記念アートプロジェクト

ボタニカルホスピタル

けやきの森にあつまるいのち

日程 シンポジウム＝2022年12月17日(土)

企画展＝2022年12月1日(土)ー2023年5月31日(水) ※展示による

場所 筑波大学附属病院

主催 筑波大学附属病院、病院のアートを育てる会議

共催 筑波大学芸術系、NPO法人チア・アート

- [凡例]
1. 各著者の肩書き、プロフィールは2024年1月時点のものです。
 2. 写真キャプション内で本院における活動実施場所の表記については「筑波大学附属病院」を省いています。

目次

はじめに 原 晃〔筑波大学附属病院〕	05
療養環境の改善をめざして 野中勝利〔筑波大学芸術系〕	07
けやき棟開設10周年記念アートプロジェクト ボタニカルホスピタル けやきの森にあつまるいのち	12
筑波大学附属病院のアート&デザイン	14
シンポジウム「医療現場におけるアート&デザインの力」	18
1 どんなときも一人の「ひと」として 〈蓮見 孝〉	20
2 附属病院におけるアートの種まき 〈五十嵐徹也+白川洋子+蓮見 孝〉	22
3 教育の現場で育つ医療とアートの芽 〈小中大地+大政 愛+貝島桃代〉	29
4 医療にとってアート&デザインの力とは? 〈原 晃+篠崎まゆみ+岩淵 敦+松崎仰生〉	41
企画展「ボタニカルホスピタル けやきの森にあつまるいのち」	56
コラム	
1 なぜ病院にアートが必要か 三ヶ田愛子〔関東信越厚生局茨城事務所〕	26
2 アスパラガスの学生がアートコーディネーターになるまで 岩田祐佳梨〔チア・アート〕	35
3 筑波大学附属病院における医芸連携 齊藤泰嘉〔常磐大学〕	38
4 小児医療におけるアートの可能性 福島紘子〔筑波大学附属病院〕	48
5 現代アートと病院での活動の関連について 村上史明〔筑波大学芸術系〕	50
6 病院で働く人の自信につながるプロジェクト 村上史明〔筑波大学芸術系〕× 新田智弘〔筑波大学附属病院〕	52
7 アートと医療ー人間らしさの両輪 森山純子〔水戸芸術館現代美術センター〕	70
筑波大学附属病院アート&デザイン年表 2002ー2023	72
Humanityを原点に 小山慎一〔筑波大学芸術系〕	77
おわりに 篠崎まゆみ〔筑波大学附属病院〕	79

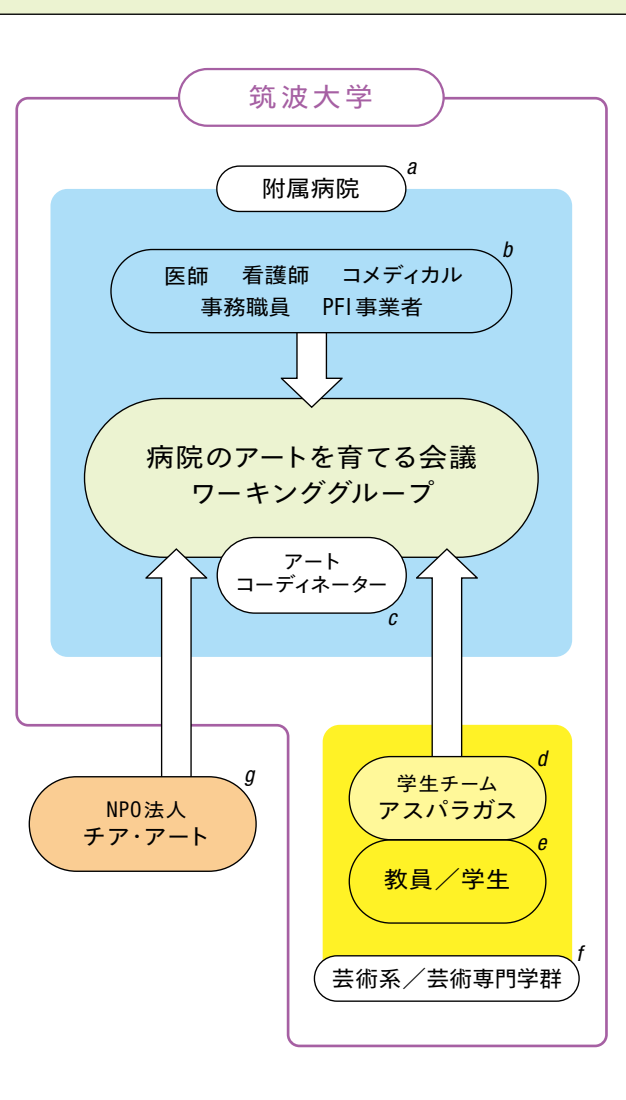
筑波大学附属病院のアート&デザイン

本院では、2002年より芸術系の教職員や学生と協力しながら、アート、デザインによる療養環境の改善に取り組んでいます。

病院のアートを育てる会議

この会議は多職種にわたる病院職員と芸術系の教員や学生で構成されます。アートコーディネーターを中心に運営し、月に1回ほど開いています。

メンバー構成



a 筑波大学附属病院
1976年に開院。病床数800床、職員数2,573名の本院は、先端医療や幅広い地域医療を提供し、県内唯一の特定機能病院として医療技術の向上に取り組んでいます。また医師・看護師・医療職の生涯教育を通じて、茨城県内外に多くの医療従事者を輩出しています。 ※数字は2023年度データ

b 医師や看護師のほか病院総務部整備推進課、医療支援課、総務・広報課などの事務職員、PFI事業者など10名以上が参加しています。

c アートコーディネーター
2013年に病院総務部企画運営課(現・整備推進課)に設置。おもに非常勤の2名体制で各所の調整や会議運営などを担っています。

e おもに美術史、洋画、彫塑、総合造形、プロダクトデザイン、建築デザインなどの領域の教員や学生10名以上が参加しています。

f 筑波大学芸術系/芸術専門学群
芸術専門学群は1975年に開学。美術史、洋画、彫塑、書、構成、各デザインなど14の専門領域にわかれていて、領域の垣根を超えて病院の活動に広く関わっています。芸術系は教員組織です。

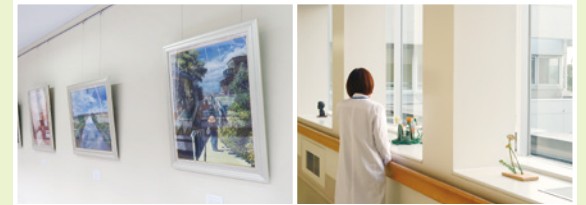
g NPO法人チア・アート
2017年に発足。中間支援組織として、アートコーディネート業務の一部を担っています。

活動内容

多様な領域の教員や学生により、展示、デザイン、ワークショップや滞在制作などのプロジェクトを展開しています。

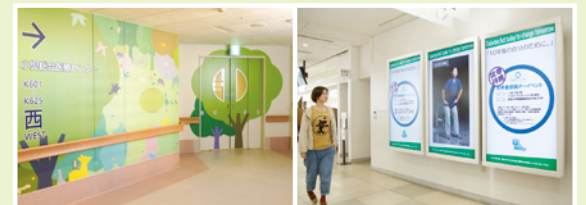
展示

院内の各所に、芸術系の教職員や学生による洋画、書、写真、映像、立体作品など幅広い分野の作品を展示しています。また、定期的に展示替えを行うことで、療養環境に変化を生み出しています。



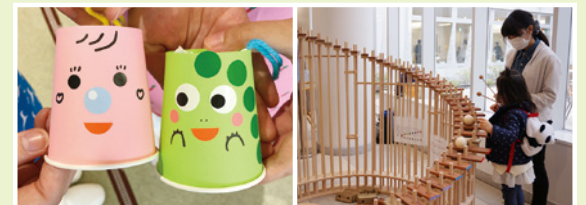
デザイン

「つくばの森」をテーマにした小児総合医療センターや来院する人を迎える庭などの空間改善をはじめ、健康や予防医療に関するツールや映像コンテンツのデザインを行っています。



ワークショップ&滞在制作

病棟や外来で、さまざまな参加型のアート活動を行っています。創作を中心としたワークショップのほか、学生やアーティストが院内で滞在制作を行い、病室に作品を届けるプロジェクトなども展開しています。



アスパラガス

病院内の空間プロデュースやワークショップなどに取り組む学生チーム。筑波大学芸術専門学群の授業「大学を開くアート・デザインプロデュース(adp)」※の一環として「病院の空気をおいしく」をテーマに活動しています。2005年の発足以来、本院のアート&デザインの中心的な活動を行っています。

※ 2005年に文部科学省によって「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」に選定されて始まった。全学学生に開かれ、専攻も学年も多様な学生たちが複数のチームを組み大学内外を実践の場として活動する、プロセス参加型実践プログラム。アスパラガスもそのなかの一つ。



これまでのおもなできごと

2002年に病院でのアート&デザインの活動がスタートし、2012年にけやき棟が開設。
2013年に「病院のアートを育てる会議」として組織化するなど、これまでの変遷を振り返ります。

2002年 「.tud（ドットタッド）」（筑波ユニバーサルデザイン研究会）が活動開始。

2005年 学生チーム「アスパラガス」が発足し、手探りでワークショップを実施。

2006年 外来診療棟と中央診療棟を結ぶ渡り廊下の改修と「アートステーション『SOH』（ソウ）」の提案。

2007年 「アートステーションSOH」が完成し継続的に活用・整備を行う。

2008年 病院でのアートプロジェクトにより多くの学生が参加できるようアスパラガスがレジデンスプログラムを実施。

2009年 アスパラガス、展示、レジデンス、ワークショップなど多様な活動を展開。

2010年 アスパラガスは、病院での課題に向き合いながら、家具制作やワークショップなどの活動を実施。

2011年 けやき棟小児エリアにアートを導入するためのワークショップが開始。

2012年 けやき棟開設。より多分野の芸術系教員や学生との協働が開始。

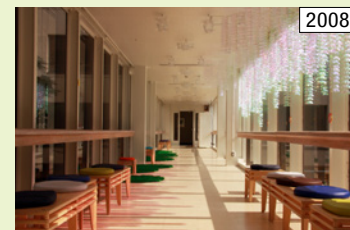
2013年 「病院のアートを育てる会議」と文化庁助成事業が開始。アートコーディネーターが設置される。



①



②



③



④



⑤



⑥

2014年 シンポジウムや研修などを実施し、病院でのアート活動をマネジメント、コーディネートしていく人材の育成を行う。

2015年 レクチャーや展示などによる内外の情報発信やレジデンスプログラムなど実験的な取り組みを実施。

2016年 筑波大学附属病院開院40周年。「ゴブリン」プロジェクトの活動記録展とワークショップを開催。

2017年 アスパラガスの活動記録展やレジデンスプログラムを実施。またNPO法人チア・アート設立。

2018年 アート活動の見学ツアーやシンポジウムを開催する。

2019年 アートコーディネーターによる展示企画のほか、学会での実践報告を行う。

2020年 新型コロナウイルス感染症による院内での活動制限に伴い、工作キットや通信を通じてアートを展開。

2021年 展示や通信などの活動を継続。院内の展示作品を用いたオンラインでの対話型鑑賞会を実験的に実施する。

2022年 けやき棟開設10周年を記念し、シンポジウムと企画展を開催。

2023年 これまでの活動を振り返り、これからの活動を模索する。



⑦



⑧



⑨



⑩



⑪



⑫

※ 各写真の番号はp.72～75に対応。

Symposium

シンポジウム 「医療現場におけるアート&デザインの力」

筑波大学附属病院の活動を振り返り、医療現場におけるアート & デザインとは何かを検証し考えるシンポジウム。第一部では初期の活動に尽力した関係者、第二部ではそれを受け継ぎ現在の活動を育てる関係者が登壇しました。またシンポジウム閉会後は希望者に向けたギャラリートัวร์を開催。計 36 名が参加しました。

〔日程〕 2022 年 12 月 17 日(土) 13:30-16:30

〔場所〕 筑波大学附属病院 桐の葉モール 2 階 講堂



第一部 病院のアートの種をまく

モデレーター：岩田祐佳梨 [チア・アート理事長]

1. 講演 ————— 20
蓮見 孝 [筑波大学名誉教授／札幌市立大学名誉教授]
2. 座談会 ————— 22
五十嵐徹也 [元筑波大学附属病院長]
白川洋子 [茨城県看護協会会長／元筑波大学附属病院看護部長]
蓮見 孝 [筑波大学名誉教授／札幌市立大学名誉教授]
3. 座談会 ————— 29
小中大地 [アーティスト／筑波大学非常勤講師]
大政 愛 [はじまりの美術館学芸員]
貝島桃代 [スイス連邦工科大学チューリッヒ校教授／アトリエ・ワン主宰]

第二部 医療にとってアートの力とは？

モデレーター：村上史明 [筑波大学芸術系助教]

4. 座談会 ————— 41
原 晃 [筑波大学附属病院長]
篠崎まゆみ [筑波大学附属病院副病院長／看護部長]
岩淵 敦 [筑波大学附属病院小児科医師／講師]
松崎仰生 [筑波大学附属病院アートコーディネーター]

どんなときも一人の「ひと」として 蓮見 孝

筑波大学附属病院でのアート&デザインの始まりは 2002 年。
当時、同大学芸術専門学群デザイン専攻生産デザインコースで
教鞭を務めていた蓮見孝氏の担当する授業でした。
現在につながる活動の原点をたどります。



うしてこんなところにこだわるのか、と思ったら、患者さんだけでなく職員が落ち着いて医療に集中できるようにデザインされていると書かれてありました。病院にもデザインが必要なのだとつくづく感じました。この本の影響もあり、その後、筑波大学附属病院（以下、附属病院）でデザインに取り組むことになりました。

筑波大学附属病院での活動のスタート

筑波大学に勤務するようになって 10 年後の 2002 年、「ユニバーサルデザイン論」という授業を担当することになったのですが、この科目は学部で授業のほか、大学院博士後期課程の自由科目にもなりました。少人数の大学院の授業には、学部の学生も聴講できるようにしました。

ユニバーサルデザインの原点とも思われる「ノーマライゼーション」は、1950 年代にデンマークで生まれた考え方で、アブノーマルなものをノーマルなものにしようというものでした。提唱者のノバンク・ミケルセンは「自分だったらどうしてほしいか」ということを考えれば良いと言っています。そこで授業では、「キャンパス内でアブノーマルなものを探すツアーをしよう」という試みを行いました。すると学生たちは「キャンパス内に病院があるのに学生は自由に立ち入れない雰囲気がある。もっと学生が病院で活動できるようにするべきだ」という問題提起をしてくれました。こうして「筑波大学ユニバーサルデザイン研究会」、略して「.tud（ドットタッド）」が生まれました。

病院のデザインに出会った 1 冊の本

私は 20 年間カーデザイナーを務めた後、43 歳のときに筑波大学に転職しました。大学では広い視野が必要になると思い、いろいろなデザイン関係の本を買って集めました。そのなかに『Hospital Interior Architecture（ホスピタル・インテリア・アーキテクチャ）』※1 という本があり、ホスピタルデザインのさまざまな事例が美しい写真とともに紹介されていました。

例えば、米国のシアトルにある病院のリハビリテーションルーム。バスターミナルのキオスクを模した部屋では、社会復帰を目指している人たちが日常に近い行動を行うことができます。これは、頑張って社会復帰しようとする人たちの気持ちに寄り添うデザインだと感じました。殺風景で冷たい印象の日本の一般的なリハビリテーションルームとは違って温かい雰囲気です。

ミシガン州にある病院の集中治療室の事例では、美しい色彩計画がなされていました。集中治療室に入る患者さんは意識のない人も多いはずなのに、ど

しかし勝手に病院をリサーチするわけにはいかないので、附属病院に相談に行きました。広い看護部長室で緊張しながら看護部長に「病院のアブノーマルをノーマルなものにしたい」というような趣旨を説明したのです。すると看護部長が真剣に話を聞いてくれて「それはいいですね」と賛同してくださいました。

そこで「早速、何かやってみよう」ということになりました。学生たちと院内のラウンドをした結果、トイレに着目したのです。高齢の患者さんが点滴棒を持って、リノリウムの床をスリッパで歩く姿は、一般の生活シーンとは違うアブノーマルなものであり、トイレは冷たく殺風景なタイル張りでした。そこでトイレが温かくなるような飾りものをつくろうということになりました。

飾りは学生たちがデザインし、日めくりカレンダーなどがついた 2 種類のオーナメントを 4 階から上のすべてのトイレに設置しました。時々、オーナメントの様子を確認しに行くと、いつ行っても日めくりカレンダーはその日の日付になっていて、患者さんか職員かはわからないけれど誰かがめくってくれていました。この経験は、病院での実践に自信を持つきっかけになりました。

米国の子ども病院の取り組み

もう一つ、自信と確信につながった出来事をお話します。2003 年に、米国オハイオ州にあるコロンバス・チルドレンズ病院を視察する機会がありました。今ではネーションワイド・チルドレンズ病院という世界的に有名な子ども病院になっています。

この病院で、いろいろと目から鱗が落ちる体験をしました。例えば入院している子どもたちのために「クラブハウス」という部屋が用意されていました。がんなどで長期入院する子どもの多くは、お見舞いに来てくれる友だちに引け目を感じがちでした。この病院では入院している子どもが、友だちをクラブハウスに招待することができます。ロッキングチェアに座りながらお茶やお菓子と一緒に楽しい時間を過ごすことができるのです。ここで大事にされているのは、どんな人もどんなときも、一人の人間としてプライドを持って生活できるように支援することなのだと思います。そして附属病院でもできる限りのことをやっ

ていこうと強く思ったのです。

.tud が生まれてから 3 年後の 2005 年には「大学を



コロンバス・チルドレンズ病院のクラブハウス（2003 年）

開くアート・デザインプロデュース (adp)」※2 という全学対象の科目が始まりました。そのプログラムの一環として、筑波大学附属病院リニューアルプロジェクトが行われ、アスバラガスというチームが生まれました。活動拠点となった場所は、物の置き場になっていた強い西日が当たる居心地の悪い渡り廊下でした。ここを改修してアートステーションにしようとする場づくりが始まり、附属病院でのアート&デザイン活動が本格化していきました。附属病院は日本でも先駆的に病院ボランティアを設置した病院で、昔からボランティアの方々が活発に活動されてきました。私たちの活動とは多少異なるところがあるものの、学生たちのアイデアを受け入れる素地があったのではないのでしょうか。

※ 1 Jain Malkin, Hospital Interior Architecture: Creating Healing Environments for Special Patient Populations, 1992, Van Nostrand Reinhold: NY

※ 2 大学院対象の授業科目名は「大学を開くデザインプロデュース」。2005 年に文部科学省による「特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）」にてスタートした。特色 GP の事業終了後も授業は継続して開設されている。

蓮見 孝 [はすみ・たかし]

1948 年生まれ。筑波大学名誉教授、札幌市立大学名誉教授。茨城県デザイン政策アドバイザー。専門はプロダクトデザイン、ソーシャルデザイン。2002 年より授業や .tud（つくばユニバーサルデザイン研究会）などを通して、学生とともに本院でのアート活動を開始。2012 年から 6 年間、デザインと看護の 2 学部を有する札幌市立大学の理事長・学長を務めた。

附属病院におけるアートの種まき

五十嵐徹也 + 白川洋子 + 蓮見 孝

2005年、「大学を開くアート・デザインプロデュース(adp)」という学内外を実践の場とする授業のなかで「アスパラガス」というチームが生まれ、病院での活動が本格的に始まりました。当時の病院長である五十嵐徹也氏、同じく当時の看護部長だった白川洋子氏を迎え、活動を受け入れた経緯について語り合います。



左から蓮見孝氏、白川洋子氏、五十嵐徹也氏

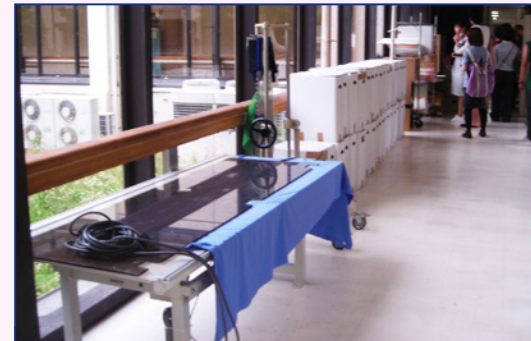
デッドスペースをアートステーションに

蓮見孝（以下、蓮見） 「大学を開くアート・デザインプロデュース（以下、adp）」で学生たちが渡り廊下を改修し、「アートステーション SOH (Seeds of Humanity)」という名の活動拠点にしたところのお話から伺っていきしたいと思います（写真①②）。2006年、学生たちが殺風景だった渡り廊下を活動場所として改修したいという計画を提案しました。このときどのようなことを感じられましたか。

五十嵐徹也（以下、五十嵐） SOHのある場所は、建物と建物をつなぐ通路です。以前は半分物置と化していて、病院の人たちが利用する空間としてふさわ

しくない場所になり、どうにかしたいと思っていました。絶えず医療従事者が行き交う診療室に近い場所と比較すると、用途があまりはっきりとしない空間でもありましたので、学生さんたちのご提案を受け、ここを活用することで患者さんやご家族が少しでも心が和らぐような空間になるといいなと期待に胸が膨らみました。

白川洋子（以下、白川） SOHができる前の渡り廊下は、整理整頓も十分ではないような空間だったと思います。学生さんたちが手を入れることで、よい意味で「病院らしくない病院」になった感じがしました。働いている私自身、そこにいくと何かほっとしたり、普段あまり話したことがない人たちが声をかけてくれたりすることもありました。こうした空間は大事だと思います。



①「アートステーションSOH」に改修する前の渡り廊下（2005年）
②窓枠の塗装と、椅子を新しくデザインし「アートステーションSOH」として生まれ変わった（2008年）

蓮見 病院は、デッドスペースが多いですよね。それが病院を少し殺風景にしている要因の一つかもしれません。デッドスペースだった渡り廊下がSOHというアートステーションになり、院内の人たちに開かれた場所になったのはとてもいいことだったと思います。病院は、医療する人／される人という対の人間関係が強いなかで、「第3の場」や「バッファゾーン」（緩衝地帯）などと呼ばれるような空間が必要とされているのではないのでしょうか。

場づくりから始まった、SOHの活動

蓮見 筑波大学附属病院（以下、附属病院）での活動の特徴は、場づくりから始まったことです。一般的に病院がアートを取り入れるときは、絵画などを廊下に展示するような「モノ」的な取り組みが行われます。ところが附属病院では学生が集まりやすかったこともあり、集まった学生たちが自然に「コトづくり」を始めていきました。例えば「co-more-bi（コモレビ）」（2007年）※1というワークショップは、参加者が思いの形に切ったフェルトをつなげていき、ツタの葉の茂みのようにして、西日の強い渡り廊下に木漏



③アスパラガス「co-more-bi」（2007年、アートステーションSOH）

れ日をつくるというものでした（写真③）。

入院している患者さんにワークショップなどへの参加を促すことは、ある意味「アートの押し売り」とも受け取られてしまうリスクがあり、極めてハードルが高い取り組みです。その高いハードルを附属病院では容易に超えたように感じられましたが、そのことに関してはどのように受け止められていますか。また、当時、病院側ではリスクを感じていらっしゃいましたか。

五十嵐 病院側では特別にリスクを感じているということはありませんでした。病院のアートは、不特定多数の人たちではなく、職員や患者さんなど、ある程度、共通の環境に置かれた人たちが見ることになります。SOHでは、そうした「見る人」を意識しながら企画されていたので、無理なく実施できたのではないかと思います。

白川 ワークショップの開催に当たっては、患者さんの状況に合わせたグループわけをするなどの配慮がされていました。ワークショップに参加することは、検査ばかりの日々を送っている患者さんにとっても心のゆとりを得られるというメリットがあったのではないのでしょうか。また、グループで行うワークショップだったので、看護師の人数が少ないなかでも看護師の負担を減らすことができました。こうしたワークショップのやり方は、筑波大学の特徴を生かしていたと思います。

蓮見 当時は学生たちが毎月さまざまな企画を考えて病院にプレゼンテーションを行い、OKが出たものを責任をもって実施するという流れでした。ただし病院からNGが出たことはほとんどありませんでした。学生の提案を受け入れてくださったことについて、改めて心から感謝しています。

五十嵐 SOHが始まったのは、けやき棟が建つ前の古い外来棟でしたね。実は私が附属病院に着任したとき、建築の建て替えが一つのミッションでした。その前にも別の病院の建て替えを手伝ったことがありました。そのときにやはり海外の病院の環境を参考にしました。病院はもともと、患者さんを一般社会から隔離する場所でした。欧米でも昔はそういう一面があったのですが、現代では社会の一部として、社会が持っている要素を病院も普通に持っているのが当たり前という感覚になってきています。さらに進んで、一般社会と連続的につながり、よりオープンになってきている病院もあります。こうした背景もあり、けやき棟の設計段階では、アートのエッセンスをどう散りばめるかも検討することができました。

白川 2008年に英国ブライトンの王立アレクサンドラ小児病院へ見学に行った際、インテリアの色彩がカラフルで、廊下には車のようなものが通るなど子どもの目線で設計されているのが素敵だと感じました。病院は機能的で使いやすいことだけではなく、美しかったり楽しかったりすることが必要なのではないかと思います。特に小児病棟ではそう感じます。

学生という異質な存在が 病院をノーマル化していく

蓮見 ちょうちょ型のブローチをつくり、みんなが胸につける「なつのおちょうさん」(2009年)^{※2}を実施したときは、医師も看護師も患者さんもブローチをつけて、病院じゅうがちょうちょだらけになりました。当時、大変怒りっぽい患者さんがいたのですが、そうと知らずに学生がブローチをつけてあげたとき、その患者さんがニコツとほほ笑みながら帰られたのも忘れられない出来事でした。心が通じるのだなという気がして。形だけきれいにするのではなく、思いが伝わるのが重要だと思いました(写真④)。

次の事例は、病室の表札に屋根をつける「ホスピタウンのメリークリスマス」(2010年、p.31)です。表札をかわいくしたいという学生の提案でしたが、屋根の三角形の形はオバケを連想させるなどの苦情が入るかもしれないと思ったので企画段階で反対しました。しかし、しばらくして病院に行ってみると、すべての病室の表札に屋根が付いていました(笑)。学生たちは私の意見を聞かなかったのですね。病院でのアー



④ アスバラガス「なつのおちょうさん」(2009年、アートステーションSOH、入院病棟食堂、外来棟廊下)

ト活動に対して苦情などはなかったのでしょうか。

白川 アートに関する苦情は特にありませんでしたね。アートがあることで、怖い人も笑顔になるといった感じでした。患者さんと医療関係者の間にある緊張感を和ませてくれる存在だったと思います。

蓮見 安心しました。SOHの活動を振り返ると、「ゴブリン博士の病院ゴブリン(以下、病院ゴブリン)」(2009年、p.29)や「目指せ日刊『くまの目』」(2009年、p.44)のほか、トークイベントを開催したこともありましたね。渡り廊下の掃除をしてくださっていた清掃員の方と看護部長が、二人とも鈴木さんという名前だったので、鈴木さんと鈴木さんで対談をしておうということで学生が提案して実施しました。当日は二人の会話が噛み合わず、ちんぷんかんぷんでした(笑)。それでも最初から最後まで笑いが絶えず、大盛況でした。オープンマインドが行き渡っていたことがわかる事例です。

「オトレール」(2009年)^{※3}も印象深いです。廊下にプラレールをつなげて、SOHを出発したおもちゃの汽車が待合室のベンチの下などを走るイベントです。病院に反対されるかもしれないと思っていましたが、開通式(展示の開始日)には当時の副看護部長

の三ヶ田愛子さんも参加してくれて、とても楽しく実施しました(写真⑤)。

しかし、次に紹介する「病院の村」(2008年)^{※4}は、企画段階で看護部の目が曇りました。渡り廊下の外にある庭と廊下のなかにテントを張るインスタレーションをやりたいと考えた学生がいたのです。渡り廊下に人が通れなくなることが懸念されました。ただ、そのことを五十嵐先生に相談しにいくと「いいんじゃないの、ストレッチャーさえ通れば」ということで条件付きのOKをいただいたのです(写真⑥)。

このように受け入れてくださる態勢は本当にありがたいと思いました。おそらく同じ大学の仲間ということで筑波大学の教員と学生たちを信じてくださっていたのではないかと思います。



⑤ 佐藤史治「オトレール」(2009年、アートステーションSOH、外来棟廊下)



⑥ 北澤潤「病院の村」(2008年、アートステーションSOH、中庭、院内各所)

白川 『くまの目』新聞の活動については、当時、何をしているのだろうと少し疑問に思っていましたが、学生さんたちの活動は、時代を先取りしていたのではないのでしょうか。今、県などさまざまなところで議論されている地域包括ケアそのものですね。病院のなかにいる人たちがそれぞれどんな暮らしをしていて、どんなことに困っているか、その聞き役をする「くまさん」という人がいて、新聞によって人と人をつないでいくところが良かった。そうしたことに、あとになって気付きました。

五十嵐 芸術を志す学生さんたちにとっても、患

者さんや病院関係者が鑑賞したり参加したりするような作品をつくることは、一つの良い経験になるのではないかなと思いながら拝見していました。

蓮見 学生たちの活動は、もしかしたらノイズだったのかもしれませんが。専門の医療スタッフと、治療を受ける患者さんしかいない静かすぎる環境にノイズが入ってきたことで、空間がノーマル化していったということだったのかもしれないね。

^{※1} 「co-more-bi」は参加者が好きな色のフェルトを選びハサミで切って制作した「ツタ」を窓ガラスや天井に貼り、大きな樹を育てるワークショップ。待ち時間を過ごす患者から忙しい職員まで、さまざまな人が参加しやすいようデザインされた。1カ月間、ガラス張りの廊下でカラフルなツタが成長し、床にはその影が落とされ幻想的な空間となった。

^{※2} 「なつのおちょうさん」はアスバラガスが患者や職員とともに「おちょうさん」をつくるワークショップ。参加者は布にスポイトで色水を垂らして模様をつくり、それを蝶の形にカットし最後に触覚のクリップをつける。世界に一つだけの模様が生まれるという偶然性が楽しく、また簡単な工程で参加しやすい。参加者は約430名にのぼり、白衣やカーテン、車椅子などに蝶が舞い、院内が彩られた。

^{※3} 「オトレール」は、アスバラガスによるアートコンペ企画「アスバラレジデンス」により、当時大学3年の佐藤史治氏が滞在制作を行った。廊下に線路を敷き、鉄道玩具の「プラレール」を走らせたインスタレーション。所要所で音が鳴り、院内に可愛らしい音を鳴らす列車が行き交った。

^{※4} 「病院の村」も「アスバラレジデンス」による企画で当時大学3年の北澤潤氏が参加。北澤氏が村長、アスバラガスのメンバーが村人となり、院内や中庭にテントをたてて3週間ほど滞在。村長や村人がノートを持って院内を歩き回り、出会った人、話した言葉、目にしたものを記録。その内容を「村誌」として公開し、院内の談話室などに配布した。よそ者の村人との異質なコミュニケーションを記録・共有した試み。

五十嵐徹也 [いがらし・てつや]

1947年生まれ。2009～14年にかけて筑波大学附属病院長を務め、在任時には国立大学病院初のPFIによる再開発計画を担当し、けやき棟の建設やアートの導入に携わった。専門は内分泌代謝学。2022～24年、茨城県病院事業管理者。

白川洋子 [しらかわ・ようこ]

1954年生まれ。茨城県看護協会会長。2008～15年3月にかけて筑波大学附属病院の副病院長・看護部長として、芸術系とのアート活動に関わり、活動の支援を行ってきた。現在は茨城県看護協会で、看護職の支援や教育に携わる。

なぜ病院にアートが必要か

三ヶ田愛子〔関東信越厚生局茨城事務所保険指導看護師／元筑波大学附属病院看護師〕

2012年まで本院に勤めていた看護師の三ヶ田愛子氏。

アートコーディネーターが置かれる前から病院と芸術の調整役を担っていました。

開院当初のことからアート活動の素地となった看護師たちの活動など

約40年を振り返りながら、なぜ病院にアートが必要かを語ります。

日本で初めて 診療グループ制を採用した病院

—

私が筑波大学附属病院（以下、附属病院）に最初に勤めたのは24歳のとき。いまから45年以上前のことです。青森県にある大学病院で働きはじめて2年がたったころ、茨城県に新しい病院ができて看護師の研修を行っていることを知り附属病院に1年間の研修生として派遣されました。1976年のことでした。

開院したばかりの附属病院は、それまでの大学病院とはまったくちがうもので、すべてが新鮮に映りました。例えばピラミッド型の「医局講座制」ではなく患者さんを中心にさまざまな職種や診療科が垣根なく治療にあたる「診療グループ制」をとっていたこと。いまでは各地で採用されていますが、筑波大学が日本で初めて取り入れた仕組みです。

また医学教育も画期的で、医学生が入院患者さんの経験をしたり看護実習をしたりと、当時としては珍しい「チーム医療実習」を取り入れていました。実習後の学生のレポートを見ると「看護師は患者さんの情報をよく知っている。自分が医師になったときに看護師の情報を活用しよう」と書いてあるのです。「筑波大を卒業し

た医師は看護師の話をよく聞いてくれる」と、転任後他病院の看護師からの評判も良くなりました。

こうした新しい病院での仕事が楽しくて、最初は1年間の研修の予定が60歳で定年を迎えるまで勤めたのでした。

—

看護師たちによる季節の行事

—

芸術専門学群により2002年に始まったアート活動ですが、私はすぐに共感しました。というのもその10年ほど前に行っていた看護師たちによるレクリエーション活動があったからです。

私は1989年から、おもに呼吸器内科と耳鼻咽喉科の病棟で看護師長をしていました。その病棟は入院が1～2年と長期にわたる患者さんが多く、その人たちに季節を感じてもらえないかと思い、始めたのがレクリエーション活動です。現在は一般的に入院期間が短くなりましたが、当時は検査から術後の措置も含めて長くなることがよくありました。そうすると患者さんにとっては病院が日常になりますので、看護師たちで季節のイベントをしようと思ったのでした。

初めてのイベントは七夕。織姫や彦星の衣装を着た看護師やレジデント（研修医）が病室を一部屋ずつまわり、一人ひとりに星形のメッセージカードを渡しました。十五夜のおきはうさぎや月、団子に扮してうさぎのカードを配り、クリスマスには聖歌隊に扮して歌いクリスマスカードを配る。症状が重い人も音楽を聞くと目が変わるんですね。そしてどのイベントでも必ず患者さんのポラロイド写真を撮ってプレゼントしました。病室では撮影をためらう方もいらっしゃいます。治療の場所で写真なんて、と。ですがベッドの上でも笑顔の写真を残すことで、本人や家族から「うれしい」「記念になった」と言われました。

それから秋には文化祭をしました。患者さんや職員から手芸品や俳句、絵などを募集して病棟内に展示したのですが、寝たきりだった患者さんが同じ病棟の人や職員から「すてきなものをつくっていたのね」と反応をもらい、「久しぶりに社会に参加ができた」とおっしゃいました。自分はベッドの上で役に立たないし、面倒をかけている思いしかなかった。そんな自分でも参加できたことがうれしい、と。その言葉は忘れられません。

—

病院に芽吹いたアート

—

看護師たちにとっても、患者さんの喜ぶ姿が励みになり、自分たち自身も楽しむことができたようです。ただし、休み時間の合間をぬって準備をしたり病棟の持ち出しで経費を工面したりなどの負担もあり、継続やほかの病棟にすすめることは難しいというのも課題でした。

2000年代に入って副看護部長になったころ、療養環境をよりよくするための「アメニティ委員会」が発足し、その担当になりました。この委員会では病院のアメニティ（快適性）を向上させるため、レクリエーショ

ンやボランティアの推進、院内を彩る飾りつけなどが企画・実施されました。

そのころ、ちょうど蓮見孝先生と.tud（ドットタッド）の学生さんたちが未来の病院のアイデアを発表してくださる機会がありました。学生さんたちの自由な発想にわくわくしたことを覚えています。 .tudの学生さんたちが具体的な病院での活動をスタートしていくにあたり、病院で患者さんたちがどのような生活をしているかを実際に自分の目で見て提案をしたいと、メンバーだった4～5人の学生さんたちに看護師のお手伝いのようなことを体験していただきました。そして初めて行ったワークショップが「クリスマスリースづくり」（2005年）でした。実施するうえで安全上の注意や気をつけてほしいことなども打ち合わせをしながら進めました。私たちのほうで実施可能な病棟をピックアップし、参加者を募りました。

参加した患者さんたちは喜んでいらっしゃいました。いつもは寝ていて治療するだけの日々なのに、若い学生さんたちと話をしながら自分の好きな作品をつくることできる。それを持って帰ってベッドに飾ると同じ部屋の人やお見舞いに来た人に声をかけてもらえるし、プレゼントもできる。看護師に連れられてしゅしゅ来た人も、参加しはじめると夢中になってリースづくりを楽しむ姿も見られました。

その後、外来にある廊下の飾り付けも学生さんたちが自ら企画を考えてくれました。のちのアートステーション SOH になった場所です。ここは患者さんが検査や放射線治療のためによく通る廊下。検査や治療への行き来にすてきな空間を通れたら、気分が少しでもよくなるかもしれない、と SOH でもいろんな活動をしてもらいました。

私は副看護部長としてアート活動を担当していましたが、情報交換や打ち合わせ、各病棟への根回し、活動の立ち合い、準備の手伝いなどをして関わってい



① 病院職員(左)とアスバラガスの学生(右)が打ち合わせする様子(2006年) ② 学生と打ち合わせをする三ヶ田氏(右、2008年)
③ アスバラガス「夏のおさんぽ会」(2011年、院内各所) ④ ③の関連ワークショップ

教育の現場で育つ医療とアートの芽

小中大地 + 大政 愛 + 貝島桃代

した。いま考えるとアートコーディネーターのようなことをしていたのですね。楽しかったです。

アートは一輪の花のように

「患者さん」と一口にいても、その人にはこれまで生きてきた人生があり、社会でのそれぞれの役割もある。看護師の仕事としては、「入院している自分」ではない時間や、少しでも日常に近い時間を過ごしてもらえたらという思いがあります。

近年、入院期間は短くなってきてはいますが、患者さんの心理は変わりません。たとえ病気があったとしても、家にいたら食べる、飲む、周りの人と話す、自然に触れる、好きな時間に寝るといった日常生活があります。それが入院したら断ち切られるわけです。テレビやベッドはあるけれど、病棟に生花は持ち込めません。コロナ禍を経て最近は面会も限られている。何気なく過ごしていた日常の行動が制限されてしまいます。そのなかで、やっぱりほっとするものや気持ちが和らぐものがあつたらいいと思うのです。

ある患者さんが個室に入院していたとき、担当看護師がベッドのそばに一輪の花を生けました。生花を持ち込めたころのことです。すると退院するときにその花にすごく励まされたんだ、と言われました。個室で孤独だったときに、たった一輪だけれど生きている存在がそばにいて、力を与えてくれる感覚になった、と。生きていて能動的に働きかけるものがあると、心を揺さぶるのですね。アートも一輪の花と同じだと私は思うのです。アートは患者さんのグレーになった心に働きかけ、彩りを与えてくれるでしょう。病院にいるのは患者さんだけではなく。その人を大切に思う家族や周りの人たちも、不安を抱えながら病院で過ごしています。もちろん、医療に携わる職員たちはいますが、そうではない別の立場で寄り添ってくれるものが必要なのです。絵でもオブジェでもワークショップでもいい。きっとアートはいい効果をもたらしてくれる。だからこの活動がずっと続いてほしいと願います。

三ヶ田(豊島) 愛子 [みかた(とよしま)・あいこ]

1952年生まれ。1976～2012年、筑波大学附属病院にて看護師として勤務。1996年より同病院にて看護部副部長を務め、アート活動が始まった当初から病院内や芸術系との調整を行った。同病院を定年退職後に厚生労働省関東信越厚生局茨城事務所にて保険指導看護師として勤務。県内の各病院にて診療報酬上の看護関連施設基準等の適時調査・指導を行う。

大学を開くアート・デザインプロデュース(adp)では多くの学生が病院での活動に関わりました。そのなかから、現在も医療や福祉に関わる活動が続ける二人の卒業生、アーティストの小中大地氏とはじまりの美術館学芸員の大政愛氏、そして教員として授業を担当した貝島桃代氏が当時を振り返ります。



左から大政愛氏、小中大地氏。貝島桃代氏はオンラインで参加した

S0Hでの滞在制作を機に コミュニケーションを伴う表現活動を探求

貝島桃代(以下、貝島) まずは小中さん、大政さんからそれぞれ当時の活動を紹介いただいたあと、そのころの経験がどのように現在に活かしているのか、伺ってきたいと思います。

小中大地(以下、小中) 僕は「ゴブリン」という妖精をつくるアーティストとして活動しています。ゴブリンとは辞書をひくと「小鬼。化け物。人間にいたずらをする妖精」とありますが、鉛筆や文房具などの小さなものから山といった巨大なものまで、さまざまなモチーフに顔を描き「ゴブリン」と呼んでいます。最初につくったのは2005年。大学3年生のときに参加した展覧会をきっかけに、継続して活動してきました。

病院での活動のきっかけとなったアスバラガスとの出会いは2009年でした。アートステーションS0H(以

下、S0H)での滞在制作に応募したことがきっかけです。2カ月間、S0Hに滞在しながら「ゴブリン博士の病院ゴブリン」※1という企画を実施し、病院にまつわるアイテムや体の器官をモチーフにゴブリンをつくりました。滞在制作の最後には、当時の五十嵐徹也病院長にも来ていただいてパレードをしました。患者さんと触れ合いながら表現活動を行ったこのときの経験から、コミュニケーションを伴う表現行為に可



① 小中大地「ゴブリン博士の病院ゴブリン」(2009年、アートステーションS0H、院内各所)

能性を感じ始めました。

この経験が原体験となり、以後、ゴ布林博士としての制作活動が、全国各地で出会った人とともにつくる地域での活動に変化していきます。活動の際は、自分を「ゴ布林博士」と称し、白衣を着て「博士」のように振る舞っていますが、そのパフォーマンスを含めたゴ布林づくりは、悩みがちな自分を前向きにさせてくれる、自身を支える活動でもあります。

その後の病院との関わりについては、2013年に筑波大学の研究員に着任したことをきっかけに、小児総合医療センターでの活動をスタートさせました。子どもたちやご家族を対象に、週に1回ほどのペースでさまざまなゴ布林づくりのワークショップを行いました。コロナ禍で休止になるまでの6年間で計175回続き、イギリスの病院でもワークショップを行

いました※2。

2016年には博士後期課程に入学し、コミュニケーション型アートをテーマに論文を書いて、博士号を取得しました。その間、はじまりの美術館の展示や地域のイベントにも参加させてもらいました。試行錯誤の日々ですが、自分のミッションを問いながら、マイペースに続けています。

2020年以降、コロナ禍では病院や地域での活動ができない時期が続きましたが、2022年から少しずつ再開しています。つい先日は、茨城県立医療大学付属病院でオンラインワークショップを実施しました。そして現在、貝島桃代先生から引き継いでアスパラガスのプロジェクトを非常勤講師として担当しています。今年のアスパラガスのメンバーは25人と過去最多の人数で、4班にわかれて活動しています。

アスパラガスでの活動を活かし 人と人をつなぐ場を考える学芸員に

大政愛（以下、大政） アスパラガスでの活動と、はじまりの美術館学芸員としての現在の活動、そのつながりについてお話しします。

私がアスパラガスのメンバーとして活動していたのは2010年から2013年ごろです。当時のアスパラガスは洋画を専攻していた私のほかにグラフィックデザインや障害科学、医学などさまざまな領域の学生が所属し、授業としてのアスパラガスの活動が終わったあとも有志として参加を継続していました。一方で筑波大学附属病院はけやき棟の新築工事が始まったころ。院内の各所に隙間が生まれていました。アスパラガスの活動はその余白を彩る活動でもあり、また院内の風景を変える役割も担っていたように思います。アスパラガスのコンセプトは先輩から受け継いだ「アートの力で病院の空気をおいしくする」です。医療者や患者さんでもない、既存の関係性を超えてフラットに関わることができる存在として活動していました。

私が関わったのは、アートワークショップやイベント、滞在制作の企画運営、SOHでの活動のほか、アーカイブの整理、SNSやブログ、学会などでの活動発信も行っていました。

印象に残っているエピソードを二つお話しします。一つは「ホスピタウンのメリークリスマス」(2010年)を実施した際のエピソードです。病院を「ホスピタウン」という一つのまちに見立て、12月の約1カ月間ワーク

ショップを重ねながらクリスマスの飾りつけの準備をして当日を迎えるという企画でした。クリスマスにはお披露目会のようなかたちで「おうちライト」と名付けた家形のイルミネーションを窓辺に並べ、遠くの夜景と重ねて皆で眺めました。その光景を見ていた患者さんが、ふと「救急車で病院に運ばれたときね……」と語り出してくれました。それまでの私は、患者さんとワークショップをしているという感覚でしたが、このときをきっかけに、互いに一人の人間としてここでの出会い、一緒に時間を過ごしているのだと思うようになりました。



④ アスパラガス「ホスピタウンのメリークリスマス」(2010年、B棟談話室ほか)

もう一つは、「夏のおさんぽ会」(2011年)※3でのエピソードです。リハビリを兼ねて院内を散歩する患者さんとの出会いから生まれた、院内各所につくったお散歩スポットと一緒に巡る企画でした。会の終わりに「今日はたくさん歩いて疲れたから、よく眠れそう」という感想をいただいたことがありました。それまでは患者さんの負担にならないように、疲れさせないようにと考えていたのですが、疲れることも役に立つのだなと思ったことが印象に残っています。

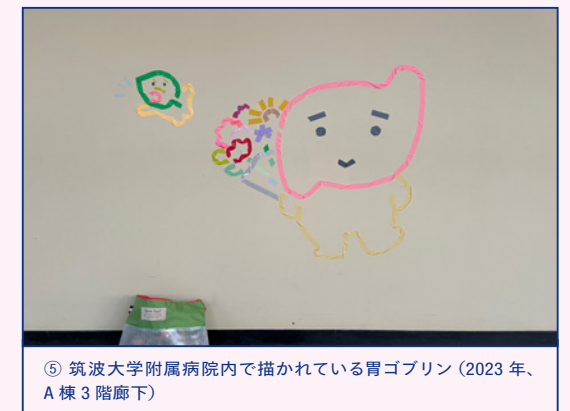
私が2016年から勤務しているはじまりの美術館では、開館前から美術館でやってみたいこと、してほしいことを誰でも自由に言い合う「寄り合い」という場を設けて、たくさんの地域の方に関わっていただいています。学生時代に病院というコミュニティのな

かで、既存の関係性を超え、人と人をつなぐ存在として自由に動き回れた経験が、現在の仕事にしっかりとつながっていると感じています。

貝島 小中さん、大政さん、素晴らしい発表をありがとうございました。私は2005年から2022年まで大学を開くアート・デザインプロデュース(以下、adp)を担当していました。私の専門である建築は、ものを通して人に関わる仕事であり、いろいろな分野をつなげる仕事です。芸術系のなかでもそういった立場から、病院のアートの種を育ててきたと思っています。

アスパラガスの活動では、建築の私の視点と、学生の視点が全然違い、驚かされていました。学生がフェルトを素材として使い始めたときは「すぐほこりがついて汚れそうな材料をなぜ使うのだろう」と最初は不思議でしたが、使うなかで柔らかなその素材のよさに気づいたこともありました。

実は、小中さんがつくるゴ布林も最初はよくわからなかったのですが、妖精というのは、見えないもの、あるいは感じてはいてもよくわからない存在ですね。それに形を与え、生命を与えるということなのだたと徐々に腑に落ちました。「胃ゴ布林」を見て「確かに胃は生きているのだな」と思ったのです。おそらく小中さんには、病院というものが硬く感じられて、生きているように思えなかったのではないのでしょうか。さまざまな医療機器も、生きているわけではありませんが、動いて我々に働きかける存在です。それらに生命感を与えたということなのだと思います。



⑤ 筑波大学附属病院内で描かれている胃ゴ布林(2023年、A棟3階廊下)

大政さんは、当時からキュレーターとしての今の仕事につながる活動をされていましたね。「夏のおさんぽ会」はストーリーのあるルートづくりがとて

も重要だったと思います。散歩を通してものの見方を変え、ストーリーによってものの見え方をつないでいく、そんな活動でした。大政さんの活動で私が覚えているのは、クリスマスのころに医療従事者と患者さんをつなぐような絵本を描かれていたことです。いろいろなメディアを統合して皆に伝える活動は今につながっているのだなと、お話を聞きながら改めて思いました。



⑥ アスバラガス「夏のおさんぽ会」(2011年、院内各所)

関わり始めたころにあったのは違和感、それとも期待感？

貝島 当時の活動と現在の活動についてお聞きしたいのですが、まずは病院に関わり始めたころに何を感じられたのでしょうか。例えば閉塞感など、病院に対して何かしらの違和感を感じたことがきっかけだったのではないかと想像するのですが、いかがでしょう。

小中 僕の場合は違和感よりもワクワクが最初にありました。滞在制作が決まって、まず病院のなかを見学してゴブリン化できそうな素材を探したのですが、本当にいい素材だらけ、ヒントだらけで。これはいけるぞ、とワクワクしました。

貝島 あまりネガティブな印象はなかったのです

ね。聴診器などいろいろなものを見て、純粋に面白い素材だと思ったということでしょうか。

小中 そうです。その後、2カ月にわたる滞在制作のなかで、課題や難しさを目の当たりにすることになりましたが。

貝島 導入ではワクワクしていたけれど段々と難しくなったのですね。大政さんはいかがですか。

大政 私も最初にあったのは、アスバラガスに入れた喜びでした。そもそも私が筑波大学を選んだ理由の一つに、adp があります。学外のさまざまな場所で活動できるこの授業をオープンキャンパスで知ったことが、大学を選ぶきっかけになりました。入学して、いざプロジェクトを選ぶ際、学生ではないとなかなか入れない場所が病院だろうと考え、アスバラガスを選んだのです。

貝島 二人とも前向きな思いで病院に入ったのですね。それはよかったです。

大政 もちろん、実際に病院に入ってみて初めて知ることや気づきはたくさんありましたし、活動するなかで厳しい言葉をもらったこともあります。「てくてくかめかめ」(2010年)という、かめのオブジェをつくるワークショップの最中に「かめなんてつくっている場合じゃないんだよ」と言われたり、東日本大震災の後には「そんなことしないで、早く被災地にボランティアに行け」と患者さんから怒られたりもしました。

貝島 病院も社会ですよ。患者さんや医師、看護師、事務職員など、病院にいるみんながそれぞれに抱えているモヤモヤがある。そのなかで、できることを模索する学生の姿や活動は、気持ちを柔らかくしたり、モヤモヤを代弁したりすることにつながっているのではないかと思います。

ものをつくり出す活動は生命の根幹ともいえる、誰にとっても大切なことでありながら「アート」というネーミングや「アーティスト」という職業、美術館という施設があることによって、特別なこととして扱われてしまうところがあります。当時、芸術の先生方のなかにも「学生たちが病院に関わりすぎると、戻って来られなくなるのではないかと危惧されている方もいました。いわゆる、現代美術のシャープな世界に戻って来られなくなるのでは、という意味です。一方で、

コミュニケーションアートやコラボレーションアートなどといったかたちで、アートの世界を切り開いているフロンティアもあります。いろいろなアートが展開されているなかで、この病院における活動も、ほかとは異なるフロンティアをつくっていたのではないかと考えています。

病院から地域へ、活かされる経験

貝島 お二人の活動はその後、地域に展開していきますね。「病院も社会」と言いましたが、地域でのアートの活動にも、大変なことがたくさんあると思います。病院で学んだことが地域での活動に役立つことはありますか。

小中 病院での活動はまさに、現在の活動のルーツになっています。病院での患者さんや職員さんとのやりとりを、地域でも続けているように思います。コロナ禍によるオンライン化などの変化もありますが、それでもやはり対面の活動には手応えがあります。ものづくりが地域の人たちを元気にし、プラスに働いていると思えるのです。継続には難しさもありますが、関わってくれた人たちの反応を見ていると、やめられないなと思います。

大政 病院にはそもそも、医療者と患者、与える側と受ける側という関係があり、そこで展開するアートも誰かのため、癒しを与えるための活動になりがちです。でもそうではなく、企てる側の学生や職員さんがまず楽しんで、面白がるのが大事だと感じました。こちらが楽しんでやっていると、周りも「面白そう、何か気になる」と、心を動かされていくのではないかと考えています。ワクワク感を持って活動をする、それは今も大事にしていることです。

貝島 つくるエネルギーや気持ちを持っていること、それが活動に表れることが重要なですね。病院や地域に対する興味、あるいはそこにいる人への興味が、つくるエネルギーや気持ちにつながり、それがどんどん社会をつなげていく。すごく創造的なプロセスだと思います。

最後に、今後の展望を語っていただきたいと思います。これからトライしたいことや今後に望むことなどがあればお聞かせいただけますか。

小中 先日の茨城県立医療大学付属病院でのオンラインワークショップは、参加した子どもたちがとてもいい顔をしていて手応えがありました。手応えを得ながら継続していくことが大切だと思っています。手応えが弱くなったりよじれたりすると続けられない。参加者が喜ぶ様子から、僕自身が喜びを得ながら継続していくことが僕の野望であり、目標です。



⑦ 小中大地「“オンライン版”茨城県立医療大学付属病院ゴブリンワークショップ」(2022年、茨城県立医療大学付属病院)



⑧ 上：はじまりの美術館 下：館内のオハコカフェでは地域の方とお客様が自然に出会うことも

大政 さきほどの座談会で、白川さんが「病院らしくない病院」とおっしゃっていましたが、はじまりの美術館も「美術館らしくない美術館」と紹介することがあります。お客さんからも「おばあちゃんみたい」と言われたりしますが、美術館らしさよりも、いろいろな人が集まる、その人がその人らしくいられる場所であることが大事だと思っています。

病院に来る理由は患者さんによってさまざまですが、病院はいろいろなコミュニティから一時的に集まって治癒したらまた元のコミュニティに戻る場所。それぞれの循環のなかにある、一つのスポットとしても捉えられると思っています。一時的に集まるそんなスポットで、その人がその人らしくいられる時間や環境づくりをこれからも続けていけたらと思っています。

貝島 「循環」、いいキーワードですね。人や気持ちをつなげていくものとして、病院や地域での活動がますます広がっていくことを祈願します。

※1 「ゴ布林博士の病院ゴ布林」は、アスパラガスによるアートコンペ企画「アスパラレジデンス」により行われた企画。

※2 2014年9月にノーフォーク・アンド・ノーリッチ大学附属病院（ノーリッチ、イギリス）で行われたプロジェクト「スーパーナチュラル・ガーデン」と、2015年9月にサウスミード病院（ブリストル、イギリス）で行われた「フレッシュ・アーツ・フェスティバル」にてそれぞれワークショップを行った。

※3 「夏のおさんぽ会」と「冬のあったかおさんぽ会」を行った。「夏のおさんぽ会」は院内に4つのゾーンからなる「おさんぽコース」を設置。1日目におさんぽ会で使用するきんちゃくをつくり2日目にそれを持ってみんなでコースをまわった。4つのゾーンにはクレーンゲームができる「みらいのテクノロジー」ゾーン、影遊びができる「おひさまギャラリー」などを用意。同年12月には「冬のあったかおさんぽ会」を実施した。

貝島桃代 [かいじま・ももよ]

1969年生まれ。スイス連邦工科大学チューリッヒ校教授。建築家、アトリエ・ワン主宰。2004年より筑波大学講師、2009～22年、同大学准教授。2005年よりアスパラガスをはじめとする学生のアート活動の指導、けやき棟へのアート導入、「病院のアートを育てる会議」の運営に力を入れた。

小中大地 [こなか・だいち]

1984年生まれ。アーティスト。2009年に本院で滞在制作「ゴ布林博士の病院ゴ布林」を行い、2014年より小児総合医療センターでワークショップを継続的に実践。現在、地域やケアの現場でコミュニケーション型アートの実践と研究に取り組みながら、筑波大学非常勤講師としてアスパラガスの指導も行う。

大政 愛 [おおまさ・あい]

1991年生まれ。福島県猪苗代町にある社会福祉法人安積愛育園はじまりの美術館学芸員。筑波大学芸術専門学群卒業。東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了。2016年より現職。筑波大学在学中の2010～13年にかけてアスパラガスに参加し「夏のおさんぽ会」「アスパラプチデンス」などに取り組んだ。

アスパラガスの学生がアートコーディネーターになるまで

岩田祐佳梨 [チア・アート理事長]

NP0 法人チア・アートを立ち上げ、

医療や福祉の分野でアートやデザインの仕事を行う岩田祐佳梨氏。

その原点となった学生時代のアスパラガスでの活動を、時代背景とともに振り返ります。

病院の渡り廊下に人間性の種をまく

ここでは、私が大学時代に仲間たちと夢中になって取り組んだアスパラガスの活動のことや、当時の時代背景をふりかえり、今の自分にどのような影響を与えているか書き綴りたいと思います。

筑波大学附属病院でアート活動を展開するアスパラガスが、大学を開くアート＆デザインプロデュース（adp）という授業のなかで、一つのプロジェクトチームとして発足したのは2005年です。発足当時の先輩たちが、ぐんぐんと上に育つ生命力を感じられる存在にという思いを込めて、「アスパラガス」というチーム名を名付け、院内でアート活動を行うときは、白いつなぎにカラフルなフェルトでデコレーションしたユニフォームを着ていました（写真①）。これは、自分たちが動き回ることそのもので、院内にいろどりとゆらぎをもたらすことができればという思いで考案されたものでした。

私がアスパラガスに参加していたのは、芸術専門学群や大学院に在籍していた2006～10年頃。物置き化していた院内の渡り廊下に手を入れ、展示やワークショップを展開する「アートステーション SOH（ソウ）」（写真②）に生まれ変わらせ、アートワークショップを企画したり、滞在制作のキュレーションを行っていました。SOHはSeeds of Humanityの略で、この場所からアートを通した人間性の種まきをしたいという思いが込められています。全学対象の授業だったので、当時のアスパラガスは、洋画、ビジュアルデザイン、総合造形、芸術支援、プロダクトデザイン、建築デザインなど、芸術

専門学群の多様な専攻の学生や大学院生で構成され、医学類、看護学類、障害科学類、比較文化学類の学生がメンバーだったこともありました。私を含め、表現力も言語力も拙い^{つたな}学生たちでしたが、夜な夜な集まっては、ケアとアートの新しい時代の幕開けに、わくわくしながら企画のことを話し合っていたように思います。

病院にノイズを持ち込むことで生まれる日常との連続性

最も印象に残っているのは、カラフルなフェルトをパレットのように並べ、好きな色を選んでツタなどの植物を思い思いにつくり、窓に展示していく「co-more-bi（コモレビ）」（2007年、p.23）というワークショップです。私たち学生は、夏休み中の約1カ月間、シフトを組んでSOHに滞在し、訪れる患者さん、家族、職員に声をかけて、少しずつ植物を成長させていったのでした。人々がつくった多様でカラフルな植物がつながることで、無機質だった渡り廊下に命が宿り、瞬間に生命力にあふれた美しい空間に変わっていきました。つくっている人だけでなく、その様子を嬉しそうに眺めている人、学生と話しこむ人、待ち時間をゆっくり過ごす人、作品を見にくる人など、工作室のような井戸端会議をする路地裏のようなアジールな雰囲気漂っていたと記憶しています。ここでは患者と職員という関係性から解き放たれ、一人の人間に戻っているように思えました。なぜ、こうした現象が起こったのでしょうか。思い返す

と、アスパラガスが院内で展開していたワークショップには、共通して大切にしていた5つのことがありました。

1. 創造の喜びを感じられるような
美しさや意外性があること
2. 五感に訴える内容であること
3. 正解や完成形を追い求めず、
多様性を大切にすること
4. そこで生まれるコミュニケーションや場を
大切にすること
5. 先生と生徒のような対峙的な関係を
つくらないこと

指導教員であった蓮見孝先生は、こうしたアスパラガスの活動を「閉鎖的な院内に新鮮な『風』や『ノイズ』を吹き込もうとする試みである」※1と評していました。日常と切り離された病院空間において、暮らしのなかにあるふとした雑音が、生活者である一人の人間としての感覚を回復させるのだと感じました。

—
ケアとアートが出会う時代
—

私が大学時代を過ごした2000年代は、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」（2000年～）をはじめとする芸術祭が各地域で開催されるようになり、コミュニティにおけるアートプロジェクトが注目されるようになっていました。さらに、アートとケアを領域横断するアートミーツケア学会が2006年に発足し、新しい時代に突入しているという漠然とした感覚がありました。SNSは今ほど普及しておらず、医療現場でのアート活動に関する情報も少ない状況でしたが、情報をかき集めて、参考にしていたのが、林容子氏らが福祉の現場で学生と進めた「アーツアライブ」（1999年～）、山口

悦子氏らが大阪市立大学医学部附属病院（現・大阪公立大学医学部附属病院）の小児病棟で行った「アートもクスリ」（2003年）、名古屋造形大学の教員であった高橋伸行氏と学生が進めた「やさしい美術プロジェクト」（2002年～）の取り組みでした。

これらの活動は、表現者側からのアートの価値観の押し付けでもなく、癒しやセラピー、装飾のみを目的としたアートでもない、アートとケアが交わることで、世界の見方を変え、人間性の回復を試みる実践や考え方を模索していました。環境の特性を活かした表現を行うことは、サイトスペシフィック・アートと呼ばれますが、つくり手が環境の特性を読むにとどまらず、そこで過ごす人々とつくり手が双方に影響しあって生み出されるアートのあり方が、ケアの現場には必要とされているのではないかと気づかされました。

—
医療とアートをつなぐアートコーディネーター
—

現在、20年の時を経て、多くの美術系大学が医療・福祉の現場との協働的な実践を行っているほか、ソーシャリー・エンゲイジド・アート、コミュニティ・アート、コ・デザインなど、社会を構成する人々とともに取り組むアートやデザインの活動が広がっています。こうしたなかで、私は、医療と芸術という専門性の異なる人たちが、ともにプロジェクトに取り組む際、両者をつなぎ、時には異なる言語の翻訳者となり、プロジェクトをマネジメントする役割として、現在、附属病院と近隣の筑波メディカルセンター病院に関わっています。

博士前期課程（修士課程）に在籍中、イギリスの王立デボン&エクセター病院に視察に行った際、アートコーディネーターの存在を知り、アートの専門職が院内に常駐していることに感銘を受けました。帰国後、ちょうどそうした人材を探していた筑波メディカルセン

ター病院でアートコーディネーター ※2として関わることになり(写真③)、そこでの実践研究を博士論文にまとめ、2017年に人の持つ力を引き出す医療・福祉環境を目指し、アート・デザインプロジェクトのコーディネートやディレクション、企画・設計などを担うNPO法人チア・アートを立ち上げました(写真④)。

以上のように、多感な学生時代に、医療現場において実践を通した学びを経験したことが、私を含めた当時のアスパラガスのメンバーにとって、現在の活動や仕事の原点となっていると思うのです。蓮見先生から引き継いでアスパラガスを指導していた貝島桃代先生は、病院でのアートの実践が「病院の環境への学び合いの場」であり、アートは「環境を考える媒介であり、仮説」だと述べているように※3、関わる人たちが一緒に学んでいく場であってほしいと思っています。さまざまな医療や福祉の現場でアートコーディネーター、アーティスト、デザイナーが職能を発揮し、一緒に共創的な実践に取り組むことで、私たちが私たちらしくふるまえる人間的な環境をつくっていけるのではないのでしょうか。

—
※1 蓮見孝「医療環境という制度を分析する」『医療環境を変える——「制度を使った精神療法」の実践と思想』（多賀茂、三脇康生編、京都大学学術出版会、2008年）。

※2 正式な職名は「アートデザインコーディネーター」。

※3 貝島桃代「創造的な場所としての病院」『いきいきホスピタル——筑波大学が取り組む病院のアートとデザイン』（齊藤泰嘉、貝島桃代監修、筑波大学芸術系、2016年）。

岩田祐佳梨 [いわた・ゆかり]

1987年生まれ。NPO法人チア・アート理事長。筑波大学在学中の2006～10年、アスパラガスに参加。けやき棟へのアート導入時はそのマネジメントを担う。2011年より筑波メディカルセンター病院アートデザインコーディネーター。2017年にチア・アートを設立し、地域の医療・福祉施設やつくり手との協働によるアートやデザインの実践と研究に取り組みながら、2021年より筑波大学附属病院のアートコーディネート業務も担う。



① アスパラガス「www」（2005年、アートステーションSOH） ②「アートステーションSOH」（2008年） ③ チア・アート（アートコーディネート）、パブリカ（デザイン）「筑波メディカルセンター病院緩和ケア病棟家族控室デザイン」 ④ チア・アートによるつくば公園前ファミリークリニックのアートワークディレクション（2022年）

筑波大学附属病院における医芸連携

齊藤泰嘉 [常磐大学特任教授／筑波大学名誉教授]

2013年から「病院のアートを育てる会議」に参加し文化庁助成事業も担当した齊藤泰嘉氏。国内外の事例を通し、アートが病院との出会いで変化したことについて語ります。

けやき棟における出会い

私は、1996年に筑波大学芸術学系（当時）の教員となり、博物館学や芸術支援を教え、2016年に筑波大学を退職した。その4年前、2012年、筑波大学附属病院（以下、附属病院）に新しく「けやき棟」という病棟が誕生。芸術系の教員は、「アートとデザインによる療養環境の改善」という課題に組織として取り組むことになった。それまでのプロダクトデザインや建築デザインの教員による演習授業や、「アスパラガス」という学生チームによる活動に加え、洋画、書、構成、総合造形、環境デザイン、情報デザイン、芸術支援など数多くの分野にわたる教員・学生も附属病院でのアート活動に参加するようになった。

だが、その第1幕は、予想外のことから始まった。例えば、美術館ではトルソ（頭や腕の無い胴体の彫刻）は普通に展示されているが、医療側の人間の眼には四肢の切断された人体と映ることがある。また、美しい楷書体の漢字が整然と並ぶ書作品が、病院では葬儀の経文を連想させるとして怖がられてしまうこともある。2012年の医芸連携は、芸術側の人間が、医療側との見方の違いを学ぶところから始まった。

アートコーディネーター職の新設

2013年に医療側と芸術側の双方が参加する「病院のアートを育てる会議」が生まれると「アートやデザインによる療養環境の改善」に対する期待感は、附属病院の中で少しずつ広がっていった。その中で浮かび上がってきたのは、医療と芸術をつなぐアートコーディネーターの必要性であった。その雇用にあたり、どのような人材が病院のアートコーディネーターにふさわしいのかと附属病院の看護部長から尋ねられた私は、以下の3点を示した。①医療・介護・福祉等の現場を少しでも知っていること、②アートやデザインについて知っていること、③学芸員の資格を持っていることの三つである。この三つの条件を満たす若い人材が芸術専門学群卒業生の中におり、アートコーディネーターとして採用され、附属病院で働くようになった。

病院スタッフは、待合室、病棟、検査室、庭園などの空間機能の違いに応じたアートやデザインの提案を芸術系教員や学生に期待しており、アートコーディネーターは、医療現場の声に耳を傾け、病院におけるアート活動を支援した。病院では、渡り廊下における油絵（風景画）や書の展示ならびに障子デザイン、患者図書室での壁画制作、待合室での液晶モニターによる映像展示や

ジャズコンサート、屋外では彫刻作品の展示を交えたセラピーガーデンの植栽などが行われ、療養環境の改善が少しずつ進んだ。小児科や精神科などで行うワークショップや、外来患者も参加できるワークショップ、さらに医芸連携に関するシンポジウム、院内見学会も実施された。こうした活動の効果について精神神経科勤務の看護師だった篠崎まゆみ氏（当時）が、「ワークショップでは患者さんの表情が変わるんです。健康な部分が出てきていることは、社会復帰につながるのです」と述べている※1。アート活動が療養環境改善につながるという声が医療現場から次第に聞かれるようになった。

海外の病院でのアート活動の調査と筑波大生による実践

2013年度から2015年度にかけての3年間は、「大学を活用した文化芸術推進事業『適応的エキスパート』としてのアートマネジメント人材の育成」という課題名の下、文化庁助成等による病院アート活動の研究と実践を医芸連携で行った。

2013年9月には、「CULTURES OF CARE アートとヘルスケア」と題した日英シンポジウム（写真①）を附属病院において開催し、英国イースト・アングリア大学の教員や研究者、ノーフォーク・アンド・ノーリッチ大学附属病院のアートコーディネーターらを招いて意見交換を行った。英国側からは、病院が地域の住民やアーティストの参加を得て院内環境の充実を図っているという住民参加型病院アートの報告があり、日本側からは芸術を学ぶ学生が病院職員と力を合わせながらワークショップを実施しているという紹介を行った。その9月には芸術系教員、研究員、附属病院看護部顧問が英国での調査を行った。ノーフォーク・アンド・ノーリッ

チ大学附属病院にはチャペル（礼拝室）もあり、そばの中庭にはアートコーディネーター、エンマ・ジャービス氏らの作品であるワイヤー製「願いの木」（彫刻）が立っていた。その根もとには、聖パウロの説く「LOVE」（愛）、「HOPE」（希望）、「FAITH」（信念）の文字が配されていた。こうした文字（励ます力を持つ言葉）も病院におけるアート活動の大切な要素となっていた。

2014年2月には芸術系教員と研究員がオーストラリアを訪問。王立子ども病院（メルボルン）は、病院と水族館と動物園が複合したような施設であった。救急車の到着する1階フロアからその上のロビー階までを貫く巨大な水槽（写真②）にはサンゴ礁のまわりをサメが悠々と泳いでいる。水槽の維持管理は地元の水族館が行っていた。待合室横にはガラスを隔ててミーアキャットのいる動物園までであった。

2014年9月には英国ノーフォーク・アンド・ノーリッチ大学附属病院を再訪。芸術系教員・研究員、芸術専門学群学生によるワークショップ・プログラム「スーパー・ナチュラル・ガーデン」を実施し、療養環境の改善に協力した。小中大地芸術系研究員（当時）の企画によるプログラムが、患者やその家族、看護師たちの誰をも笑顔にさせた。内容は、「ゴブリン（いたずら好きの妖精）」という名のキャラクターへの変身、インスタントカメラによる撮影、その写真のプレゼントなどである。病床で体中をチューブでつながれて無表情であった子どもの入院患者は、ゴブリンの目鼻を背中に付けたプレイナーの姿を見た瞬間、にっこりとほほ笑んだ（写真③）。

2015年9月には英国ブリストル、サウスミード病院を訪問。同病院が主催した地域交流行事である「フレッシュ・アーツ・フェスティバル」というイベントに芸術系教員・研究員、芸術専門学群学生が参加した。学生たちによる病院建築デザイン案の展示、折り紙、書の実演などが好評を博した（写真④）。

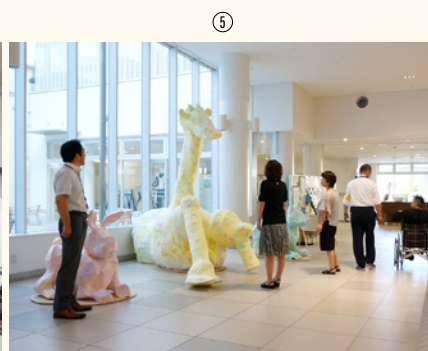
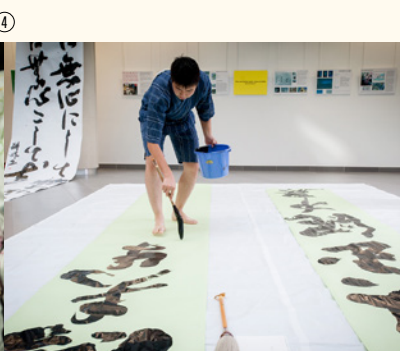
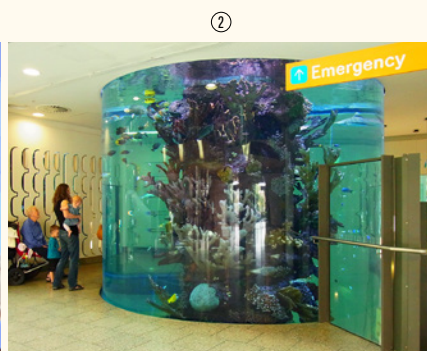
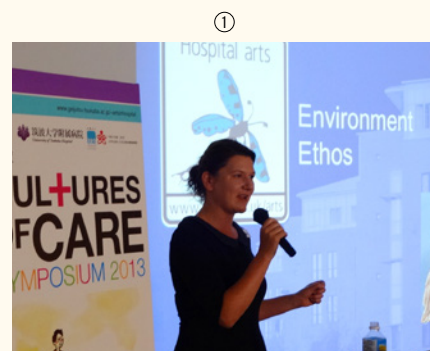


Photo by Clint Randall

医療にとってアート & デザインの力とは？

原 晃 + 篠崎まゆみ + 岩淵 敦 + 松崎仰生

モデレーター：村上史明

最後の座談会は、現在の病院でのアート活動を担うメンバーです。病院長、看護部長、医師、アートコーディネーターとそれぞれの立場から、心に残るエピソードやこれからの病院のあり方を考えていきます。



左から岩淵敦氏、篠崎まゆみ氏、原晃氏、松崎仰生氏、村上史明氏

子どもに病気や治療を よりよく理解してもらうために

村上 各視点から医療環境におけるアートの意義や必要性などをどのように感じているのか、具体的なエピソードも交えて話題を提供していただきたいと思います。初めに岩淵先生の方からご紹介いただきます。

岩淵 小児科医師の岩淵です。私は小児の患者さんの入院や外来の治療をしており、おもにお子さんのホルモンの病気を担当しています。今回は2019年から村上先生にもご尽力いただいた糖尿病予防のためのキャラクターをつくったプロジェクトをご紹介します。

1型糖尿病という病気は、1日に何回も自分の体にインスリンの注射を打つなど精神的に負担をもたらしますが、お子さん自身が病気についてよりよく理解するための理想的な治療をできていない実情があります。そうしたお子さんが「まるで自分が悪いことを

しているから罰を与えられている」といった捉え方をしてしまうこともあります。そうではないことを教育資料で説明するのですが、やはり万人向けの内容なので不足した部分があり、より個別化したいと思っていました。それで、私と村上先生や学生さんと理学療法士でプロジェクトチームをつくり、おもに小学校高学年を対象にしたマンガをつくりました(写真①)。

このマンガは、ある日急に糖尿病になってしまった小学4年生くらいの男の子が「グルッシー」というオリジナルのキャラクターと対話しながらいろいろな体験を乗り越えていくストーリーです。読んだ子どもが自分の体で何が起きているのかを理解して、主人公と一緒に乗り越えられる気持ちになってもらいたいと、キャラクターの表情変化にも力を入れ、何度も相談を重ねてつくっていただきました。マンガには実際に外来で聞いた「やっぱりデブには向いてなかったんだよ～」といった自虐的な台詞も含んでいます。肥満は子どもの自己肯定感を下げってしまう問題がありますが、生まれつきの体質のほか医学的にはさまざまな要因が関係していてご自身に問題があるわけではないこともマンガのなかで伝えています。

けやき棟や台湾でのつくばスマイル

2015年には附属病院において「アーティスト・イン・ホスピタル」というプログラムを実施した。アートとケアの関係を医療と芸術の関係者がともに考え、病院における新しいアートのあり方を提案する公募方式の企画であった。学生たちから病院アートのプログラム案を広く募った。審査に当たっては、建築デザインの貝島桃代芸術系准教授(当時)が審査委員長となり、附属病院の小児科医師、看護部顧問、アートコーディネーター、茨城県つくば美術館学芸員、芸術系教員らが審査に加わった。選ばれたのは、飯田瑠璃子「Animal × Life — きりんのフレディ、うさぎのマシー、ねこのトム」(写真⑤) はじめ3組であった。芸術専門学群の若い学生たちは、紙によるねこなどの彫刻づくりを来院者参加で行うため、けやき棟エレベーター前でワークショップを開き、通り過ぎる人たちに笑顔で声をかけた。一人の外来患者がそこに立ち寄り、無言のまま左手で絵筆をとり、白い紙に明るく透明な色をさっと一筆塗って静かに立ち去った。彼の右手には純白の包帯が巻かれていた。手首から先は失われていた。

私は、筑波大学を退職後、その男性と思われる人物と再び出会った。つくば駅そば筑波大学サテライトオフィスで附属病院の上野友之医師(当時)が行った医芸連携セミナーでのことである。その男性は自分の描いた何枚かの絵をスマホで見せてくれた。彼は附属病院の医療とアートで自分の新しい道を見つけ、前を向いて歩いているように見えた。

2020年から常磐大学(水戸)で再び学芸員養成の仕事をするようになった私は、2022年には台湾の国立成功大学向けのオンライン授業で附属病院でのワークショップ、「なつのおちようさん」(2009年)など医芸連携活動を紹介した。かつて筑波大学の芸術支援コースに短期留学し、セラピーガーデンの植栽で鎌を握った謝雨芸さん(現在、台南市美術館勤務)の巧みな通訳で受講生たちは榊原郁恵『夏のお嬢さん』の歌とのつながりも理解し、台南市美術館の所蔵品を用いた「美術館処方箋」(認知症予防の芸術療法)実習を笑顔で実践した。けやき棟で育ったつくばスマイルは世界に広がっている。

医療側の変化、芸術側の変化

けやき棟ができてから10年が経った。医療側も芸術側も共に変化し、附属病院における医芸連携型療養環境改善活動は着実に進んでいる。医療側の変化は、附属病院のパンフレットにも現れている。メインエントランスの紹介の中で、「アートのスペース」が紹介されており、そこには「通路の壁に心なごむ写真作品などを展示しています。気軽に足を止めて鑑賞できるコーナーです」と書かれている。芸術側は、私も含め、冒頭で書いたトルソに対する医療側の違和感も理解できるようになった。また、病棟渡り廊下における書の展示では、作品を制作した学生本人が丁寧な説明文を添え、硬く見える楷書にも優しい気持ちが籠っていることを伝えるようになった。その成果を世界に向けてさらに発信することが大学の社会貢献として求められている。

※1 齊藤泰嘉、貝島桃代監修『いきいきホスピタル — 筑波大学が取り組む病院のアートとデザイン』(筑波大学芸術系、2016年、p.26)。

齊藤泰嘉 [さいとう・やすよし]

1951年生まれ。常磐大学特任教授、筑波大学名誉教授。専門は美術論、博物館学、近代の造形思想。北海道立近代美術館、東京都美術館、東京都現代美術館での学芸員勤務を経て、1996年より筑波大学に教員として勤める。2003年に同大学芸術専門学群に特別カリキュラム芸術支援学(現・芸術支援領域)を立ち上げ、以後2016年まで注力。

原 日本における病院でのアート活動は基本的に歴史が浅く、これから育てていく分野です。新しい取り組みだからこそ、現在の附属病院のように学生が活動する道筋は貴重で、これを育てていきたいと思っています。「病院のなかに芸術がある」のではなく、例えば美術館に来る感覚で「美術館があってそのなかにたまたま病院がある」といった雰囲気になるのが僕の理想です。こんな偉そうなことを言っていますけれども、私は2018年から病院長になった当時は、正直に申し上げると「なんでアートに資金を出さなければいけないんだ」とアートの意義を理解していませんでした。「スタッフにとって働きがいのある病院にするためにはどうしたらいいのか」ということに頭がいっぱいで、手術室や職員の数を増やすことに注力していたのです。

本院には「患者さんの声」という投書箱があります。その大半は否定のお声ですけれども、たまにお褒めの言葉があり、その多くはアートについてです。これは僕にとっても大変な癒しで感謝しています。僕が一番変わったのは、2020年に登壇者として参加したトークイベント※2で、大阪府堺市にある耳原総合病院では、ICUでも壁画プロジェクトを行った※3というお話でした。落ち着いた小児科や外来ならわかるけれど、ICUは戦場です。そこでそんなことができるのかと「え!？」と驚きました。病院長は「そういうところにこそアートが必要」とおっしゃっていて目から鱗が落ちました。私も将来的にはそうしたいと思いますが、なにせ大学病院は時間がかかってしまひまして。いずれにしても将来的には壮大な話ですけれども「美術館があって、そのなかに病院がある」という夢があってもいいのではないかなと思っています。

村上 「患者さんの声」にも言及いただきましたが、アートを実施する側は患者さんがどう受け取られているのか、実際の声を聞く機会は少ないので、そうした投書はありがたいです。以前に患者さんから「(展示されている) 作品を買いたい」といった問い合わせもありましたが、学生にとって励みになっていたようです。私たちも病院のアートはまさしく新しい分野でアートコーディネーターもこれから増えていくと思っています。松崎さんからご自身のお仕事の紹介をお願いします。

作業療法と融合させられないかと考え、当時の看護部長と副部長に相談してアスパラガスをつないでいただいたのです。

外からイベントを入れるというのがこれまでにない試みでもあり、危険なものは持ち込めないという事情もあって、実施までの打ち合わせも含めた準備には結構時間がかかりました。実際に行ったワークショップの1時間は、その瞬間、その場所の空気が変わったような感じがしました。想像以上に多くの患者さんに参加していただいたのですが、一緒に作業をするなかで一瞬健康なときの表情を見せてくれるんですよ。患者さんのなかにある健康な部分を引き出した瞬間だったなと思いました。ワークショップでつくったものはしばらく病棟に展示していたのですが、西陽が差すと部屋のなかに彩りをもたらししてくれました。テープを貼った窓だけではなく、その部屋全体の色が変わっていく。アートには社会とつなぐ力があり、人と人をつなぐ力があるように思いました。

村上 精神神経科病棟という閉鎖的な空間けれども人と人がつながり、アスパラガスの Motto でもある、まさに「空気がおいしくなる」瞬間だったのです。作業療法とアスパラガスのワークショップはどのように違うのでしょうか。

篠崎 作業療法は、患者さんがものをつくったり、体を動かしたりなどの作業を通して社会に復帰するための準備をする、リハビリのような治療ですが、その作業がアートになると患者さんのモチベーションが上がった印象がありました。作業療法にアートを取り入れるというのは私も初めてでしたし、学生さんも初めて精神神経科の病棟に入り、患者さんと触れ合って一緒にアートを紡ぐ経験はきっと大きかったのではないかと思います。

村上 作業療法は「役立つ」という目的があるため患者さんも受け身になってしまうかもしれませんが、アートは「やってもやらなくてもいい」という自由な部分がありますので、そこで患者さんの能動的な行為を触発して、癒しにつながっていくのかもしれない。次に、病院長の原先生からアートの意義やその必要性についてお話いただけますか。

村上 先鋭的な取り組みだったためにそうした困難もあったのですね。私も関わって思ったのは、プロの制作会社などでつくる教材と違うのは何度もやりとりが発生することです。岩淵先生はマンガを制作した学生と何十回もやりとりし、密なコミュニケーションのなかでつくられていました。そのことで、実際の現場で聞かれた患者さんの言葉などよりリアルな描写が取り入れられたのではないかと思います。続いて、看護部長の篠崎さんから、医療環境におけるアートの意義などを教えていただけますか。

閉鎖的な病棟の空気をおいしく彩る

篠崎 私は精神神経科の師長として二つのワークショップ「まちなみを描こう」(2013年)と「コップタウンをつくらう」(2014年)に関わらせていただきました※1。精神神経科は病院のなかでも閉鎖的な空間で、患者さんの安全を守るためには病状によって行動制限を行うので、病棟以外に外に出られない方もいらっしゃる。こうした状況から何か病棟のなかでできることはないだろうか、また無機質な環境にもう少し彩りを添えられないか、と考えていました。それまでに学生さんたちが病院内でワークショップを開いているのを見ていたので、これを精神神経科の



② アスパラガスによる「まちなみを描こう」(上:2013年)と「コップタウンをつくらう」(下:2014年、B棟7階精神神経科)



① グルコースをモチーフにしたキャラクターが登場する堀内菜穂ほか『グルッシーマンガ2』(筑波大学、2021年)

できるだけ多くの子どもに読んでほしいと思ったので、配布のための費用をクラウドファンディングで募りまして、世の中には「お子さんの病気を助けるために力になりたい」と思っている方が大勢いるんだと改めて実感できました。2020年から約2年間、県内の小学校に配布したり、他県の糖尿病を扱う専門家に無償で送付したりといった活動を行いました。

村上 岩淵先生は、芸術のジャンルのなかでも特にマンガというメディアに可能性を持たれたのですね。特に大変だったところなどはありますか。

岩淵 資金を集めるところは予想外にスムーズでしたが、難しかったのは小学校への配布にあたり県の教育委員会に「ぜひ教育委員会公認というかたちで配布させてください」とお願いしたところ却下されてしまって。マンガの内容は問題なかったのですが、小学校の学習指導要領を超越した教材ということで「教育委員会の公認は難しい」ということでした。ですが、なんとかすべての小学校に配布させていただきました。

アートの「評価」の難しさ

松崎 アートコーディネーターは、病院と芸術双方の窓口を担っています。これまで、「病院のアートを育てる会議」の運営をはじめ、展示やデザイン、ワークショップなど、本院で展開されるさまざまなアート&デザイン活動に対して、調整やサポートに取り組んできました。

日頃からこうした活動をどのように振り返り次につなげていくかを考えているのですが、今日はみなさんのお話を聞いてポジティブな意見をいただけていると安心しました。医療の分野は「病気を治療する」という明確な目的がありますが、アートやデザインは「よくわからないけれど心地いい」「なにか気になる」といった曖昧な部分があります。そういった存在が患者さんや職員にポジティブな影響を及ぼすのか及ぼさないのか。それは数値ではかることが難しいかもしれませんが、今回のシンポジウムのように少しずつ積みもったエピソードも、これから活動を続けていくための指標につながっていくのかなと改めて思いました。

村上 実際に患者さんや先生から聞く声、投書のご意見なども評価ですよ。定量的な評価ができるとよいですが、感性を数字だけではかるのも難しいので、質的な評価として少しずつ積み上げていくのも重要だと思います。

それでは次の質問ですが、筑波大学附属病院のアート&デザイン活動の大きな特徴は学生の介入です。教員の指導や病院のマネジメントも大きいですが、学生自身が主体的に動き、活動を広げてきた側面もあります。学生が病院と協働することについてどのように考えていらっしゃるか、改めてお聞きしたいです。

学生による「動のアート」

原 さきほど申し上げた通り、新しい分野で教える人が少ないと思うのです。だから、学生の新しく柔軟な発想でやっていただくのがよいのだと思います。ご質問とは外れるかもしれませんが、たまに「患者さんの声」のなかで「暗い絵は省いてほしい」というものがあります。僕はそれは違うと思っていて、もちろん「明るく」というのは必要でしょうけれど芸術って

そういうものだけではないと思います。将来的には多様な作品が展示できるとよいでしょう。学生さんの発想には、医療や患者さんに寄り添う気持ちが根本に感じられるので、どんなアイデアも大歓迎です。

村上 原先生がおっしゃったようにアートは明るいだけではないですよ。アートは目に心地よいだけでなく心を揺さぶる表現などもあります。そうしたものの将来的な実施の展望もいただき大変励みになります。篠崎さんはいかがでしょうか。

篠崎 さきほどの原先生の「美術館のなかにある病院」は素晴らしいと、私も賛同させていただきま



③ 鈴木平人「目指せ日刊『くまの目』」(2009～10年、アートステーション SOH ほか)

す。2013年ごろに学生さんたちが、それこそストレッチャーが通るのに邪魔かなと思うくらい積極的に病棟に入ってきてくださっていました。展示が「静のアート」だとすれば、「動のアート」のような取り組みです。今はコロナ禍でなかなかそれが実現できない状況ですが、コロナ禍が明けた折には溜め込んだエネルギーで花を咲かせて「動のアート」も復活できたらいいなと思います。私も「目指せ日刊『くまの目』」※4や「ゴブリン博士の病院ゴブリン」(p.29) は特に記憶に残っています。病棟のニーズに沿ったワークショップを行っていただき、学生さんが積極的に患者さんと関わる時間を設けられたらうれしいです。

村上 「動のアート」というのはワークショップのような、実際に学生がそこに介入をして、周りにいる人や空間が巻き込まれていくことで一つのアートとして成立するということですね。岩淵先生はいかがでしょう。

病院に学生が入り込むということ

岩淵 小児科の立場からしますと、学生さんは子どもにとって年齢に近い大人なのです。年齢が近いと感性や経験も近いと思います。立場的にもまだ社会人ではないので共感も生まれやすい。学生さんも一生懸命やってくださるから気持ちが伝わりやすいのもあるかもしれません。

村上 学生は、患者さんにとっては利害関係のない他者ということに加えて、年齢も近くて子どもたちと仲良くなりやすいのかもしれないですね。松崎さんは学生のときはご自身がアスバラガスとして病院のなかで活動されていましたが、何かあればお聞かせください。

松崎 アスバラガス時代、血液内科の無菌病棟でワークショップをしたのですが(写真④)※5、師長をはじめ職員のみなさんにはいつも優しく声をかけてもらいましたが、今振り返ると「なんて無謀だったんだろう」と思います(笑)。徹底した感染対策を行っている病棟に白いつなぎを着てトコトコと入っていくなんて。患者さんに対しては「嫌な思いをさせてしまわないか」「体調は大丈夫か」など緊張しながらワークショップの日を迎えていましたが、いざやってみる



④ アスバラガス「まど百景」(2017年、けやき棟 6階東病棟)

と「近所の優しいおじちゃん、おばちゃん」のようで。患者や医療者といった立場を超えて、一人の人間として向き合える瞬間が本当にあるんだと実感できたことを覚えています。

村上 職業や立場を超えて人間同士のコミュニケーションが生まれたというのは素晴らしいなと思いました。次は今後の課題についてです。病院でのこうした活動は「病院のアートを育てる会議」という月に一度の定例会議で話し合っています。これまで約10年間続き、もうすぐこの会議は100回を迎えます。次の10年を考えるにあたり、療養環境の課題を踏まえて今後のアートへの期待がありましたらぜひ教えていただきたいなと思います。

「病院のアート&デザイン」を伝えていく

原 蓮見先生の講演(p.20)で海外の病院が紹介されていましたが、今後の改修の際は、病院そのものをアートのようにしていきたいと考えています。現在のコロナ禍でまだ病院の出入りが制限されていますが、そういうときこそ患者さんや職員にアートやデザインが必要だと思います。

篠崎 私も「病院のアートを育てる会議」に出席していますが、我々のようにこのプロジェクトに関わっている職員は活動の意義を理解していますが、直接関わっていない職員はまだまだ「なんだろう?」という疑問を持っていたり、活動そのものも知られていないかもしれません。ですので、私たちが積極的に職員たちに伝えていくことが大事だと思いますし、そこが課題なのかなと考えています。できるだけ多くの職員や患者さんも含め「病院のアートってこういうことなんだよ」と伝えていけるよう努力していきたいです。

岩淵 小児科では「プレパレーション」というものが重視されています。これは処置を受ける前の子どもへ病気や治療の説明をし、心の準備と環境を整えることです。大変重要な過程なのですが、アメリカやイギリスではプレパレーションを行う専門職がいるのに対し、日本では現場の医療スタッフが行っていて、時間も人手もかかります。ただ日本はアニメやゲーム、マンガなどの文化が育っていて、子どもにも魅力的なコンテンツが豊富なので、病院でこれらを取り入れたプリパレーション用資材の開発ができたらと考えています。

原 さきほど岩淵先生も紹介されていましたが、病院でのクラウドファンディングは非常に敏感に反応してくれます。病院のアートも知名度が増せば増すほど資金も集めやすくなるのではないのでしょうか。

これからの医療環境におけるアート

村上 病院内外への広報活動も重要ですね。筑波大学附属病院のウェブサイトには昨年度からアートのバナーが登場しましたが、いろいろな方法で広く周知していけたらと思います。それでは最後に、今後の理想的な医療環境についてみなさまがどのように考えていらっしゃるか、少し壮大な質問ですが教えてくださいただけたらと思います。原先生からお願いします。

原 将来的には医療はなくなり、すべて「ウェルビーイング」になっていくだろうと想定しています。ただ現状は、ウェルビーイングと医療のあり方が必ずしもパラレルではなく、集約していく方向でもないの、近未来的には難しい問題かもしれません。

篠崎 大変難しい質問ですが、これからますます高齢者が増えていく世の中で、子どもも高齢者も一緒にいられる環境が生まれるといいなと思っています。例えば高齢者が利用するのは「介護施設」に限定せず、子どもや若者も一緒に集うことのできる施設とか。そういう場所も増えてきていると思いますが、違う世代が混ざり合って健康を維持していけるといいなと。

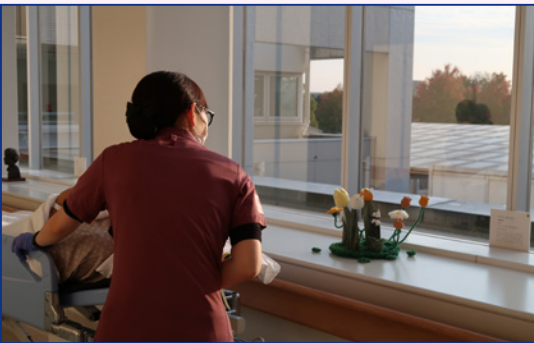
村上 アートには多世代をつなぐ役割も担えるかもしれませんよね。岩淵先生いかがでしょうか。

岩淵 病院は社会から隔絶された存在、患者さんは健康な人から分離された存在というイメージが強いですが、実は連続しているものなのです。その境界線が薄らいでいくような世の中になっていく気がしております。そこにいろんな人が参入し、アートで活気づく場もできていけばいいと思っています。

村上 垣根がなくつながっていくイメージですね。では松崎さんからお願いします。

松崎 本院の現在の活動を例にしますと、若くて健康な学生にとって病院はかなり縁遠くなかなか馴染みがない場所です。でも病院って必ず人生で一度は訪れる場所なので実は身近なのですよ。アートやデザインを病院のなかで展開することで、学生自身が病院の未来を想像できるようなことにつながればいいなと思います。

原 筑波大学は2022年に「DESIGN THE FUTURE 機構」※6を立ち上げましたが、今後デザインやアートがすべての学問にとって必要になってくると思います。医学に限らず自然科学、社会科学、人文科学などを



⑤ 彫塑領域学生有志「緑の廊下へようこそ」（2022年、けやき棟2階渡り廊下）

融合する「デザイン」「アート」が必要になってくるのでしょうか。

村上 医学と芸術が同じ組織のなかにあるのも本学の大きな特徴ですので、ぜひそれを活かしてさまざまなことにチャレンジしていけたらと思います。これからの医療環境改善に向けて、芸術の可能性も感じることができました。ありがとうございました。

※1 「まちなみを描こう」はマスキングテープで風景をなぞり、そのなかにゼラチンを混ぜた粘度の高い絵の具を塗ることで病棟内の窓がステンドグラスのように彩られた。箱庭療法にヒントを得た「コップタウン」ではプラスチックコップに患者の好きなモチーフを配置しそれらを積み重ねた。

※2 アートミーツケア学会 2020年度 総会・大会 フリンジ企画トークイベント「コロナ禍で実践される病院のアート・プロジェクト」（2020年11月）。

※3 「耳原総合病院 希望のともしびプロジェクト2017」。

※4 「目指せ日刊『くまの目』」は、アスパラガスによるアートコンペ企画「アスパラレジデンス」により、当時大学4年の鈴木平人氏が滞在制作と展示を行ったプロジェクト。鈴木氏が「くま」に扮し、患者やスタッフを取材。その人となり伝える『くまの目』新聞を発行した。

※5 「まど百景」は、アスパラガスが外出が難しい患者向け、「まど」をワークショップで制作し、病棟の廊下に展示。「まど」はクリアケースに好きな色の木材や飾りを貼り、風景写真を入れた。

※6 地球規模課題解決のために、国連が設定した持続可能な開発目標（SDGs）やそれに継ぐBeyond SDGs に対して研究や教育によって取り組むプロジェクト。

原 晃 [はら・あきら]

1952年生まれ。筑波大学副学長／理事／附属病院長。専門は耳鼻咽喉科学。2018年より病院長に就任し、患者さんや職員の満足度の高い真のマグネットホスピタルの実現を目指している。現在、B棟の耐震改修工事業や陽子線棟施設整備運営事業を推進している。

篠崎まゆみ [しのざき・まゆみ]

1966年生まれ。筑波大学附属病院副病院長／看護部長。認定看護管理者。2012年より精神神経科病棟棟長として、アスパラガスによる「まちなみを描こう」「コップタウン」に関わる。2022年より現職。

岩淵 敦 [いわぶち・あつし]

1978年生まれ。筑波大学附属病院小児科医師／診療講師。2003年より筑波大学附属病院小児科勤務。2019年より、子ども向けの糖尿病予防啓発のためのコンテンツ制作などに関わる。

松崎仰生 [まつざき・あおい]

1997年生まれ。筑波大学附属病院アートコーディネーター。筑波大学大学院芸術支援領域修士課程修了。在学中の2016～18年にかけてアスパラガスに参加し「まど百景・どんつきまど」に取り組んだ。2020年より現職として、院内のアートコーディネートに従事している。

村上史明 [むらかみ・ふみあき]

1978年生まれ。筑波大学芸術系助教。2012年、けやき棟へのアート導入に参画し、院内での映像作品を手がける。以後、病院職員を被写体とした写真展「ドリームポートレートシリーズ」、脳卒中や糖尿病の予防啓発のためのコンテンツ制作に学生とともに取り組んでいる。

小児医療におけるアートの可能性

福島絃子〔筑波大学附属病院小児科医師〕

けやき棟開設準備と同時期にスタートした「病院のアートを育てる会議」に、初期から10年経た現在も参加する福島絃子氏。小児科の医師として、どのような思いで関わってきたのでしょうか。

日常生活や自分らしさを感じる瞬間を届けたい

私が芸術系の方々と初めて出会って一緒に仕事を始めたのはけやき棟の開設準備のための活動を通してでした。もともとアートが好きだったこともあり、芸術の専門家の方々と一緒に活動ができることに少し興奮し、大変嬉しかったことを覚えています。この10年間で芸術の先生方の活動が筑波大学附属病院内外の様々なところで発展しているのを見かけるようになりました。国立大学で唯一、芸術と病院を有する筑波大学ならではのユニークな活動の一つであり、本学で発展すべき活動の一つでもあると考えています。「病院のアートを育てる会議」に関わらせていただいてもう10年経つのかと思うと感慨深く、何か貢献できたのか自問する機会にもなりました。今後も私たちの生活を豊かにしてくれるアートを患者さんや働く職員にも届けられるような手助けができればいいな、と思っています。

さて、私たち筑波大学附属病院の第一の目的は様々な理由で医療を必要とする方々に元気になってもらうことや、より幸せな気持ちや満足した気持ちになってもらうことにあると考えています。そのためには第一義に心身ともに健康になるような実質的な医療を提供することが必要です。もちろん、学術・教育機関として目の前の患者さん以外にも発展的に広く、茨城県から始

まる日本全体、世界にも発信する社会貢献ができるような活動も重要な役割の一つです。ところが個々の患者さん一人ひとりを思い浮かべたときに、薬や手術などの実質的な医療提供や治療によって身体を元気にするだけでは、患者さんを元気にするには足りないときもあります。患者さんや個人が元気さや幸せ、日々の生活に満足を感じるためにはそれ以外のことも大切です。例えば、そこにアートが関わってくれることで同じ身体

の健康状態であっても、より幸せや満足を感じてくれる瞬間を提供できるのではないのでしょうか。本院は茨城県内においてこどもの高度医療を提供する病院の一つでもあります。こどもは元気でいてほしいものですが、様々な理由で医療を必要とし、病院に通ったり入院生活をおくったりしています。医療を必要とするこども達にとって、痛いことをされたり、病室に閉じ込められたりする場である病院は時に嫌なところになるかもしれません。そんな時に嫌な気持ちになる場から楽しい気持ちになる場にアートの力で変えられたら、どんなにいいことでしょう。退院できない、嫌な治療を受けなければいけない、医療自体は身体

の健康のために必要なことかもしれません。それでもその中でアート活動を通じてその瞬間だけでも嫌なことを忘れて、日常生活や自分らしさを感じてくれる瞬間が届けられるといいな、と思っています。また、こども

達は遊びを通して様々な発達や社会勉強をしています。こども達の成長の過程で少しでも嫌な体験や気持ちを減らすことができればよいですし、社会勉強や発達といった場も病院におけるアート活動が提供してくれていると感じています。私たちは病気のある子も、ない子も、ともにその子なりに元気にすくすくと育ってほしいと願っています。

表現と医療の価値観の差異を超えて

病院は職員の働く場でもあります。患者さんに元気を提供する医療者自身がまず健康で元気でいないと、よりよい医療は提供できません。この観点においても、病院内に様々なアート作品が設置されていることはとても良い効果を生んでいます。この10年の間に、様々なアート企画が展開され、作品が展示されてきました。特にこの数年はアートコーディネーターの方の人数も増え、経験値も増し、本当に素晴らしい作品や企画が提案・掲示されていると感じています。時に職員の間でも話題になる作品もたくさんあり、活動の末端を担っている者として嬉しく聞いています。

これまでに印象深い作品はたくさんありますが、第一にけやき棟開設時の多くのプロジェクトが印象に残っています。小児病棟を埋め尽くすかわいい動物たちの絵(p.15)、雲形の額縁(写真①)、天井を彩るモビール(写真②)、こどもたちのイラストが現実になる3Dプリンターの造形作品「けやきイレブン」(p.73)、処置の恐怖を軽減するためのプロジェクターによるアニメーション投影、カーテンにもかわいらしさを演出していただきました。以前の小児病棟からは隔世の感があるとても賑やかな病棟になりました。小児病棟で働く職員、こどもたち皆が明るい気持ちになれたことと思います。また、アーティストの小中大地さん、通称「ゴブリン先生」の活動もこどもたちにとって「ときどき来てくれる楽し

いお兄さん」という印象で、定着してくれました。最近の作品では、ちょうど小児病棟から検査や治療に行く動線上にある彫像作品群(p.62)や渡り廊下の布や糸を使った作品はこどもたちも興味深いくつも見てくれています。殺風景な廊下を通る中で見かけるこのような作品はこどもたちの冒険心をくすぐってくれるのではないのでしょうか。

けやき棟ができてから10年。芸術系の先生方との相互理解や歩み寄りが着実に進んできていると感じています。私が委員として活動を開始した初期の頃に、病院の中庭に設置する像について委員会で話し合いがなされていました。その像は芸術的な観点からは、大変素晴らしいものだったと思いますが、病院職員から「ちょっと病院に置くにはふさわしくないかな」と意見が出ていました。このことを後日振り返った芸術の先生が「作品として大変素晴らしいと感じていたが、病院にはふさわしくないという意見をもらって驚いた」とお話しされていたことを印象的に覚えています。このことは、芸術の発表の場や表現者としての目線と医療者の患者への目線とで大きく異なる価値観があることをあらわしていると感じました。また、この点を理解したうえで病院におけるアート活動というものはまだ始まったばかりであり、この後育っていくものなのだと

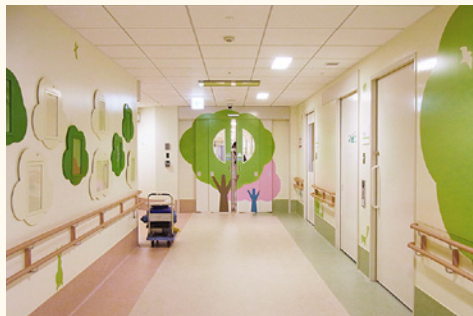
思ったものです。病院という施設は社会から隔絶されているようで、社会や日常生活の場でもあります。ともすると偏った価値観や考え方で運用されがちな病院組織の中で、多様性のある専門家が集まって病気を持った患者さんたちの健康や幸せのために活動していることは本当に素晴らしい活動だと思っています。今後とも相互に交流や歩み寄りを続けながら発展していけるとよいと願っています。

—

福島絃子〔ふくしま・ひろこ〕

1979年生まれ。筑波大学附属病院小児科医師・医学医療系講師。2008年より筑波大学附属病院小児科勤務。専門は小児血液・がん、人類遺伝学。2021年より筑波大学附属病院小児緩和ケア委員長に着任し、こどものケアや支援を提供。2012年より「病院のアートを育てる会議」に参加し、院内のさまざまなアート&デザイン活動に携わる。

①



②



③



① 木村浩、高野牧子、狩野裕哉「つくばの森」グラフィック展開（2012年、小児総合医療センター） ② 構成専攻学生「つくばの森」モビール作品（2013年、小児総合医療センター） ③ 村上史明研究室、メディアアート演習履修生「つくばの森」アニメーションワークショップ（2013～15年、小児総合医療センター）

現代アートと病院での活動の関連について

村上史明 [筑波大学芸術系助教]

2013年の初回より「病院のアートを育てる会議」に参加し、筑波大学芸術専門学群の総合造形領域で教鞭をとる村上史明氏。これまで学生とともに映像、マンガ、ゲーム、キャラクターなどのメディアで病院と関わってきた経験から、現代アートの歴史を軸に医療空間との連関を探ります。

作品のある空間と、作品を見る人との関係

総合造形領域では、現代アートやメディアアートといった20世紀以降の芸術活動を取り扱っているが、本分野は福祉や医療とは関係のないようにみえる。芸術は疾病を治癒することを目的としているわけではないし、病院は美術館ではない。

しかしながら、医療空間という「特別な空間に作品を設置する」という意味においては、強い連関を有する。なぜなら、20世紀以降の芸術は、視覚的な審美性だけではなく、ヒトの身体性や作品が設置される空間についてもしばしば言及されるようになったからである。この理由については、時代を遡る必要がある。

科学の発展に寄与したパラダイムシフトとしては、哲学者のルネ・デカルト（1596–1650）による主客二元論が知られている。精神と身体、もしくは主体と客体を分離させることによって、対象物を客観的に観察することが可能となった。これまで神によって創造された世界を普遍的なものとして考える世界観から、科学によって客観的に計測される世界を普遍的な世界として認識することによって、神学的な呪縛から解放され、科学が大きく前進した。

芸術の分野においても、このパラダイムシフトは例外ではない。例えば、フィリップ・ブルネレスキ（1377–1446）によって発見された透視図法では、画家と被写

体を固定するだけではなく、眼球をも片眼に限定することによって、本来空間を感じることもない2次元の平面に、遠近感を生じさせることが可能となった。つまり、主体と客体を分離することを基盤とした表現技法であり、それによって風景画というジャンルが確立した。

一方で19世紀後半から、主客二元論のような、対象物と観察者を分離させて、対象物を客観的に観察する考え方に抗おうとする動向がみられるようになった。その萌芽としては哲学者のエドムント・フッサール（1859–1938）による現象学が知られているが、芸術の分野においても現代絵画の父と言われるポール・セザンヌ（1839–1906）の作品にその影響がみられる。

セザンヌの絵画では、同一の平面上にモチーフが並んでいないことがある。「りんごとオレンジ」（1899年）では、描かれた複数のりんごが、同一のテーブル上に配置されているように見え、今にも落下してしまいそうである。これは描画上の誤りであるようにみえるが、実際はそうではなく、セザンヌが複数の視点から眺めたモチーフの表象が、1枚のキャンバス上に合成されているのである。そして、複数の視点から構成された絵画をみるものは、視覚を通じて視点の移動を伴う身体の動きを知覚する。現象学と芸術の関係性を指摘したモーリス・メルロ＝ポンティ（1908–61）が、「私たちの知覚の遠近法は、いきられた遠近法なのであって、幾何学的な遠近法でもないし、写真の遠近法でもない」



① ポール・セザンヌ「りんごとオレンジ」（1899年、オルセー美術館）
② ロバート・スミッソン「スパイラル・ジェティ」（1970年、ユタ州）
③ 鈴木平人「目指せ日刊『くまの目』」（2009～10年、アートステーションSOHほか）



と指摘するように※1、鑑賞者は身体を有している以上、眼球を伴う身体は固定されことなく常に空間を動き、対象物を複数の視点によって知覚し、それらが単一の物体として統合されるのである。ここでは、身体を固定することによって、単一の視点からの構図を提供する遠近法と比較し、より芸術家や鑑賞者の身体やその身体が存在する空間に対して意識が向かう。

他にも20世紀中盤以降に、特別な空間に作品を設置することを目的とした、インスタレーション・アートと呼ばれるような作品群がみられるようになる。米国ユタ州グレートソルト湖に螺旋状の土地を造成し、巨大なサイズであるがゆえに、視覚だけでなく鑑賞者の身体的な知覚が必要とされる、ロバート・スミッソン「スパイラル・ジェティ」（1970年）や、アーティストの歩行による痕跡を示した、リチャード・ロング「A LINE MADE BY WALKING」（1967年）など、美術館ではなく自然環境に作品が設置され、地球上の空間における身体のあり方について言及した作品が見られるようになる。これまでの、古代ギリシア以降の芸術概念では、アートを精神的なものと、身体的なものに二分し、前者を高級、後者を低級と見る考え方によって、身体的な感覚は疎外されてきたのであるが、そのような考え方に対して異を唱えているのである。

鑑賞者の身体は空間の中に存在し、人と空間は分割することができず、客体視することが困難であることが基盤となっている。もはやその身体は傍観者的に空間に存在する芸術作品を眺めるものではなく、鑑賞者と作品は空間にまきこまれ一体化しているのである。

—

伝統的な価値観から逸脱した、療養空間でのアート

—

以上のような立場に立つとき、医療と芸術の類似性はより一層明確となる。例えば、身体性という観点に

おいては、精神と身体を分けて考えることはできない。心の不調が身体に影響を及ぼすことも、その逆も起こり得る。心身を二元論的に捉えた医療行為は現代では考えられず、全人的なケアが必要とされるであろう。

また、空間という観点においても、病院などの医療空間と美術館やギャラリーの空間を比較すると、空間の装飾が少なく白い壁面を有しているという点においては、類似しているようにみえる。しかしながら、身体がまきこまれた空間という観点で捉えた場合、相違点があきらかとなる。例えば、医療空間における身体とは、心身のなんらかの不調を訴える患者のことであり、またそれを支える家族・友人のこともある。加えて、その空間で医療を行う医師や看護師をはじめとする医療従事者も含まれている。このように様々な属性の身体がこの空間に同時に存在するが故に、その空間はそれらの身体のために存在しなければならない、その空間に設置される作品においても、その空間の身体に対して最大限に配慮する必要性を有しているのである。すなわち、医療空間におけるアート作品の展開は、美術館での作品展示よりも現代アートの考え方に近いのである。

筆者は筑波大学赴任時から、このような考え方を持っていたわけではない。しかしながら、学生が病院内で活動し、その行為によって入院患者のコミュニケーションが活性化したことを目のあたりにすることより、現代アートとの類似点を認識することとなった。例えばある学生は、着ぐるみを着用し、病棟の患者にインタビューを行うことを通じて、病棟内で互版のような掲示を行った（鈴木平人「目指せ日刊『くまの目』」2009～10年）。また、他のある学生は病院の敷地内で仮設のテントを設営し、医療関係者とコミュニケーションを行いながら滞在した（北澤潤「病院の村」2009年、p.25）。これらのプロジェクトは、伝統的な芸術の価値観からは逸脱しており、審美性にかかわる表象による美があるとはいえない。しかしながら、精神と身体を統合的に捉えながら、その空間にまきこまれた身体という観点においては、現代におけるアートの考え方が表出しているといえる。芸術は医療空間におけるアートの展開を必要としているのである。

—

※1 モーリス・メルロ＝ポンティ『メルロ＝ポンティ・コレクション』（中山元訳、筑摩書房、1999年、p.250）。

病院で働く人の自信につながるプロジェクト

村上史明〔筑波大学芸術系助教〕 × 新田智弘〔筑波大学附属病院整備推進課主幹〕

本院で働く職員たちの「夢」をテーマに学生たちが制作した「ドリームポートレートシリーズ」(2017～18年)。医師や看護師のほか検査技師、栄養士などあらゆる職員が被写体になり語り継がれるプロジェクトになりました。授業を担当した教員の村上史明氏と企画の発案をした病院職員の新田智弘氏に企画の経緯とプロセスについて話を聞きました。

病院で働く人の「夢」を表現

——「ドリームポートレートシリーズ」はその前に本院で展示していた「つくば、はたらくひと」(2012～16年)がベースとなっています。どのような経緯で企画がスタートしたのでしょうか。

村上____ 両展示とも、私が担当した写真表現を学ぶ授業で、学生たちが取り組んだ作品になります。けやき棟の建設準備のタイミングで私も「病院のアートを育てる会議」に参加するようになり、最初に写真の展示を担当したのが2012年の「つくば、はたらくひと」でした。これはつくば市内で働く人たちを撮影する課題ですが、完成した20～30点の作品のなかから同会議で審査をし、選ばれた約10点を院内に展示しました。それを4年ほど続けていたところ、新田さんから「病院で働く人に焦点を当ててみるのはどうでしょうか」と提案をいただきました。

新田____ 村上先生から「つくば、はたらくひと」の撮

影先が多岐にわたり調整に苦労されていると聞いていたので、病院なら自分が調整できると思ったのもきっかけです。病院で働く人という医師や看護師というイメージが強いですが、本院に働く約2,500人の職員には多様な仕事があり、患者さんを支えています。それをアートを通じて伝えてもらうことで、患者さんと職員のコミュニケーションがうながされるかもしれないと思い、ご提案しました。

村上____ 医療現場というと白衣や手術着を着ているイメージがあります。でも病院で働く人たちにも日常生活があり趣味がある。新田さんのアイデアを聞いて、その人自身を深掘りする作品を制作できないかなと考えました。それで「夢」をテーマにしたのです。夢といっても、寝ているときの夢や将来の夢、捉え方は自由でもいいかなと。学生たちは4～5人のチームになってモデルになる人に取材をして撮影し、写真の合成技術を使って夢の世界を表現した作品になります。

——モデルはどのように選ばれたのですか。



①「つくば、はたらくひと」(2013年、けやき棟3階術前外来ほか)



②「ドリームポートレートシリーズ」(2018年、けやき棟1階)



③手術部の医師をモデルにした作品
大溝明日奈、田口朱凜、藤田瑞樹「Parallel」(2017年)

新田____ 医師や看護師、薬剤師のほか、入院患者さんの食事を考える管理栄養士、医療機器のメンテナンスを行うMEセンターの臨床工学技士、患者サービス課(現・医療支援課)の事務職員など、なるべく仕事の多様性を見せられるように声をかけました。基本的には各部局に依頼して、そのなかから推薦をもらうかたちです。ほかの企画もそうですが、まずは「病院のアートを育てる会議」で通った企画を、患者サービス委員会と執行部会議で承認を得ることで、病院全体のコンセンサスを取りました。

村上____ 直接患者さんと接しない職種の方々が多かったと思います。私自身、これだけの仕事があることを初めて知りました。

新田____ 例えば患者さんの食事をめぐってもいろいろな人が働いています。メニューを考えたり患者さんに栄養指導を行う管理栄養士、アレルギーチェックや調乳など患者さんの状況に応じた対応を行う栄養士、食事をつくる調理師など。細かいですがこんな仕事もあるんだよと、知っていただけたらと思いました。

村上____ 最初に30～40人ほどの履修している学生を集めて、新田さんが病院内をツアーしてくださいましたよね。一般病棟をはじめ物流センター、救急部、放射線部、薬剤部、検査部、ICU病棟なども入らせてもらいました。学生たちにとってこの経験は大きく、その後の制作の礎になりました。良いディレクションは、クリエイティブな行為を発露するための土台づくりに関わるのですよね。そのあと、担当のモデルを決めてチームごとに取材や打ち合わせを始めました。

新田____ こちらでもアートコーディネーターにも入ってもらい調整を進めていきました。手術部にいた麻酔科医の高橋伸二先生(2020年転出時手術部副部長)は、担当チームを手術室にも案内してくれましたよね。一般の人はなかなか入る機会はないですが、学生さんたちは術衣に着替えて見学をさせてもらいました。

村上____ その作品は、高橋先生が子どものころの夢だった野球選手や教師、それから実家の跡とりに扮し、現在の自分と一緒に同窓会をしているというユニークな構成でした(写真③)。医療現場を間近で見たからこそ生まれた作品だと思います。実際に居酒屋で撮影させてもらい、そのあと同会場での打ち上げに高橋先生も参加してくださったと聞きました。お忙しいなか学生たちと関わってくださったのがうれしかったです。

芸術と病院の 対等な関係から生まれた作品

新田____ 仕事の合間をぬって参加してくれた職員には負荷をかけたかなと心配でしたが、みんな喜んでくれていました。1年目の展示を見た品質安全課の職員が、「もし次があるなら自分をモデルにしてほしい」と名乗



④手術室やヘリポートを見学する学生たちと新田氏(右)



⑤ 撮影は芸術専門学群にあるスタジオでも行った

り出てくれたこともあって。2年目に参加してもらい、ピアノを弾く姿を撮影しました(写真⑥)。

村上_____ヘリポートで撮ったんですね。ピアノを弾く姿はあとで合成をして。それこそ普段は立ち入ることが難しい場所だったので安全に配慮しながらも撮影できたことが良い経験になりました。職員のみなさんは荒削りな学生の制作を優しく見守ってくれて楽しんでくれました。

新田_____のちに展示を見た患者さんから「この作品を購入したい」という問い合わせもあり、見る人にとっても心を打つ作品が生まれたのだと思います。

——最後に、改めて今後の病院でのアート活動に期待することはありますか。

村上_____「ドリームポートレートシリーズ」で学んだことは大きくて。それはコラボレーションの体制が重要だということです。受注と発注といった関係ではなく、お互いがつくり上げていく対等な関係をつくることができました。デザイン分野では当たり前のことかもしれませんが、美術分野においても他者の協力によって良い作品が生まれることが学生たちにも伝わったと思います。今後も病院での活動を通じて、こうしたプロジェクトが生まれるきっかけづくりをしていきたいですし、それによってアートの新しい領域も拡張されていくのではないのでしょうか。

新田_____アスパラガスが掲げる「病院の空気をおいしくする」というコンセプトを借りると、病院の空気を吸っているのは患者さんだけでなく職員も同様です。職員たちの親近感にもつながり、いつもの仕事に光を当ててもらったこのプロジェクトは病院内外の評判もよく、



⑥ モデルになった職員(右から2番目)と制作した学生

職員たちの励みにもなったでしょう。「ボタニカルホスピタル けやきの森にあつまるいのち」で展示してもらった江崎聖桜先生(p.59)のように、クリエイティブな一面のある職員も多いのです。これまでは芸術の先生や学生さんたちを中心にワークショップや作品づくりをしていただいていたいましたが、2026年に迎える本院の50周年に向けて、職員も自ら作品や展示をつくるようなプロジェクトを実現できたらいいなと思います。

村上史明 [むらかみ・ふみあき]

→ プロフィールは p.47 に記載

新田智弘 [にった・ともひろ]

1967年生まれ。1986年に筑波大学に入職し2005年より附属病院に勤務。2012年よりアート活動のマネジメントに携わり、病院のアートを育てる会議の立ち上げやアートコーディネーター職の設置に関わる。経営企画課、企画運営課などを経て、2019年よりアートコーディネーターが勤務する筑波大学附属病院総務部整備推進課にて主幹を務める。

[聞き手：佐藤恵美、松崎仰生、岩田祐佳梨]

Exhibition

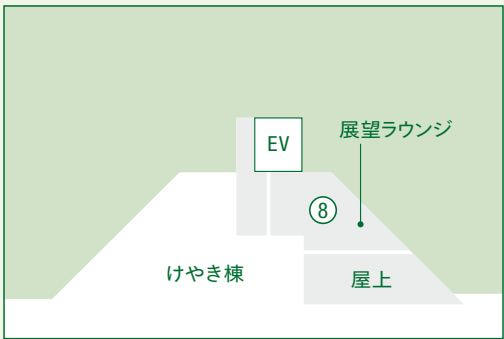
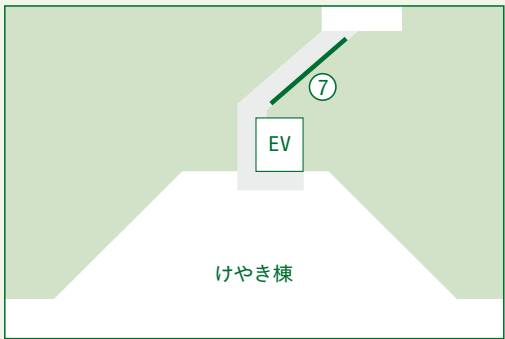
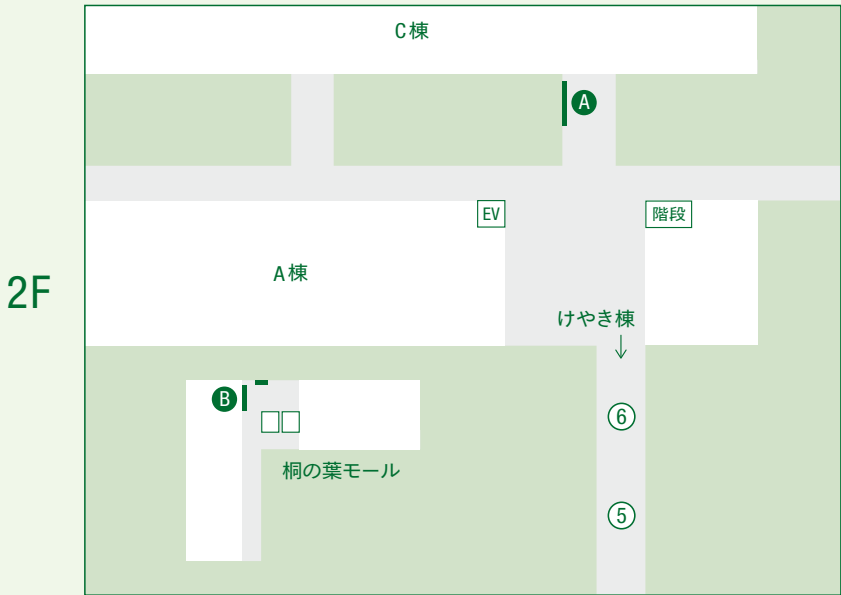
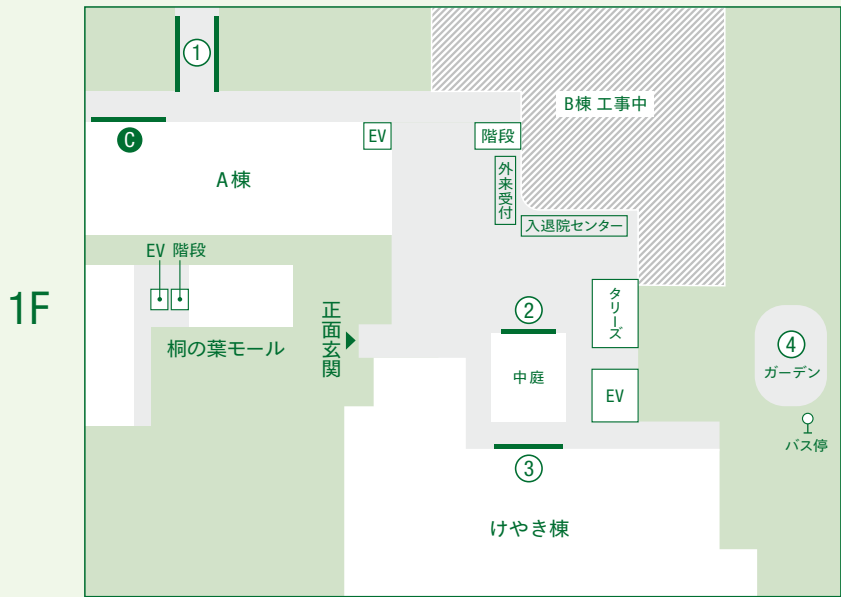
企画展

「ボタニカルホスピタル けやきの森にあつまりのち」

けやき棟を舞台に筑波大学芸術系や附属病院に属する8組のチームが油絵、彫刻、書、壁画、アートプロジェクトなどさまざまな展示を行いました。企画展のタイトルは、本院のアートの種がまかれた2002年から約20年をかけて活動が育ってきたことにちなんでいます。油絵や書などこれまでも継続的に展示を続けてきたチームをはじめ、初めて参加する人も植物や生態系をテーマに作品を制作。新型コロナウイルス感染症の影響により病院利用者へ向けた展示となりました。

〔日程〕 2022年12月1日(木)－2023年5月31日(水) ※展示による

〔場所〕 筑波大学附属病院 けやき棟ほか各所



※ ①～④は関連展示。

成長記録 アスパラガス、咲くかがやく。

アスパラガス



📍 A-C 棟 1 階 渡り廊下「アートステーション S0H」

コロナ禍でできることを模索した成果展

大学1年生を中心とするアスパラガスが活動拠点とする「アートステーション S0H」での展示は3企画の活動成果展とした。多職種にわたる病院職員へのインタビューをもとにその素顔を似顔絵で表現した「すがお絵の木」、入院中の患者も創作活動を楽しめるワークキット「アスパラ宅配便」、患者や職員との交流を目指しチームの活動を発信する新聞『アスパラガス通信』。各企画の試作品や活動風景の写真など、コロナ禍で院内での活動が制限されるなかでできることを模索するチームの成長過程も展示し、渡り廊下を彩った。

作者コメント

『アスパラガス通信』は交流のきっかけとなる紙面を目指すなかで、届ける方法やレイアウトなどを試行錯誤して完成させることができた。「すがお絵の木」作成にあたってのインタビューは、職員の仕事に対する思いから休日の過ごし方まで盛りだくさんのお話を伺え、メンバーにとっても充実の時間になった。「アスパラ宅配便」は現在進行中の企画だが、アスパラガスの活動を知って、病院での実現を楽しみに待っていてほしいという思いで展示を行った。(唐澤依緒里)

作者：アスパラガス | 学生チーム

展示期間：2023年3月2日～

担当教員：小中大地 [アーティスト/大学院人間総合科学術院非常勤講師]

協力：篠崎まゆみ [看護部長] / 翠川晴彦 [精神神経科医師] / 福島紘子 [小児科医師] / 久野遥加 [総合診療科医師] / 中島久雄 [看護部] / 横山千恵 [検査部] / 平井理心 [医療支援課移植コーディネーター] / 下代孝弘 [つくばネクストパートナーズ施設等管理業務担当者]

SHIN_TAI

江崎聖桜



📍 けやき棟 1 階 入退院センター前

作品を媒介に個人と個人の関係になる

本院に整形外科の医師として勤務していたアーティストによる作品を、病院のなかでも人通りの多い入退院センターの受付付近に展示。患者から譲り受けた樹齢300年を超えるケヤキをくり抜いた。樹の半分はゴツゴツとした本来の木肌が残し、もう半分は彫刻や油絵具による彩色に加え菜種油で磨くことで人肌のような滑らかさが現れた。タイトルには、大樹の「神体」と「身体」の神聖さを併せもつ存在という両義が込められている。

作者コメント

患者さんと医療スタッフとの交流を持つきっかけとなり、医療者以外の自分の立場がつかれたと感じる。院内では疾患のこと以外でコミュニケーションを取る機会は多くない。それぞれ医師、看護師、患者といった役割や立場があり、自ずと会話は集約され関係性は明確化される。その中で、この作品が媒体となり個人と個人の関係が一瞬にして成立することに喜びを感じた。すれ違いざまにエレベーターの中で、また回診をしているときなどのふとした瞬間に「あの作品、先生のなんですね!」「どうやってつくったんですか?」と話しかけられてふっと緊張が解け距離が近くなる。温かく不思議な瞬間がたくさん生まれた。(江崎聖桜)

作者：江崎聖桜 (えざき・せいおう) | 整形外科医師

展示期間：2022年12月8日～2023年12月2日

西洋美術技法演習Ⅱ「テンペラ技法」

西洋美術技法演習Ⅱ「テンペラ技法」履修学生有志



📍 けやき棟 1 階 エレベーターホール横 ホスピタルモール

テンペラ画の技法で描かれた生き物

芸術専門学群の開設授業「西洋美術技法演習Ⅱ」を履修した学生有志 10 名による作品展。定期的に作品の展示替えをしている「ホスピタルモール」と呼ぶ廊下に展示した。鶏卵に油を添加して乳化させ、顔料を混ぜた絵具で描く「テンペラ・グラッサ」と、不透明の白色テンペラ絵具と透明色の油彩絵具を交互にのせて描く「テンペラと油彩の混合技法」のどちらかの技法が使われた。また背景に使われる金箔・銀箔は硫黄と反応させる「硫化」の技法によってさまざまな色の変化を生みだしている。

教員コメント

企画展のテーマ「耕す・蒔く・育てる」をもとに、学生に図案を用意してもらったが、意外にも植物ではなく動物をモチーフとして選択する学生がほとんどだった。テンペラ画の描写技法の一つである細い線を集めて描く「ハッチング技法」が動物の毛並みを描くこととマッチしていたためと思われる。病院展示ということで患者さんやそのご家族がふわふわの毛並みの動物たちの作品に触れて、少しでも癒しとなれば幸いである。(星 美加)

作者：西洋美術技法演習Ⅱ「テンペラ技法」履修学生有志

展示期間：2023 年 2 月 2 日 ～

担当教員：星 美加 [芸術系助教]

小さな動物園

「立体加工基礎演習」履修学生有志



📍 病院入口バス停前 ガーデン

ガーデンに集まった手のひらサイズの動物たち

学生 22 名による作品を、病棟の東側に位置するガーデンで展示。シリコンゴムを素材に、イヌ、リス、クマ、ブタ、フクロウ、トカゲ、カエルなどさまざまな動物たちを手のひらサイズの立体造形として表現した。本物そっくりの色や質感でつくられた動物のほか、メイクやコスチュームなどで華やかに装飾された動物も。設置場所は、ガーデンで花を育てる筑波大学園芸クラブとも相談しながら決定。会期中は病院利用者だけでなく、散歩中の園児たちが見て楽しむ姿も見られた。

教員コメント

筑波大学芸術専門学群開設授業「立体加工基礎演習」と「総合造形創作演習 A-II」を履修した学生による手のひらサイズに表現された小さな動物たちの作品を展示した。作品にはさまざまな動物の形態や色彩が施され、ガーデンに彩りを与えることができた。通りがかる人や散歩の人々の目にとまり、皆笑みをこぼされていた。心に癒しとゆとりを与えることができたと感じた。(小野裕子)

作者：「立体加工基礎演習」履修学生有志

展示期間：2022 年 12 月 21 日 ～ 2023 年 3 月 14 日

担当教員：小野裕子 [芸術系助教]

緑の廊下へようこそ

會澤優花／鹿山卓耶／木崎由実子／佐藤 萌／野口珠希／
羽室陽森／町野紗恭〈彫塑領域学生有志〉



📍 けやき棟 2階 渡り廊下

集中治療室へ続く廊下を多素材の彫刻で彩る

おもに大学院に在籍する彫塑領域の学生有志 7 名による作品展。木、石、テラコッタ、ブロンズなどを素材にした彫刻は、植物そのものをモチーフにしたもの、人の暮らしにおける植物の在り方に着目したもの、幻想的なイメージの世界を表現したものなど多様な作品があつまった。天気や時間帯による光の変化とともに、作品は異なる表情を見せる。外来棟と集中治療室を結ぶ渡り廊下に展示したが、会期中はストレッチャーで移動中の患者と職員と一緒に作品を見ながら会話する場面も見られた。

作者コメント

私は普段、道端にある道祖神^{どうそじん}やお地藏様のよう
な石仏をモチーフに制作することが多い。それら
が持つ静かなたたずまいや、人になでられ、ま
た風雨にさらされて摩耗し丸みを帯びた形には、
愛おしさや心の安らぎを感じる。今回の展示では、
そうした石仏が持つ、癒しや心休まる形を目指し
制作をした。また、石材に使った大理石はグレー
と緑の取り合わせが目にも優しく、その緑色の結
晶を石仏に生える苔に見立てたいと思い、素材に
選んだ。(野口珠希)

作者：會澤優花／鹿山卓耶／木崎由実子／佐藤 萌／野口珠希／羽室陽森／町野紗恭〈彫塑領域学生有志〉
(あいざわ・ゆか／かやま・たくや／きざき・ゆみこ／さとう・もえ／のぐち・たまき／はむろ・ようしん／まちの・さきょう)

展示期間：2022年11月10日～2023年11月14日

担当教員：川島史也〔芸術系助教〕

怪獣医療

澤田 亮



📍 けやき棟 2階 渡り廊下

聴診器をユーモラスな怪獣に

医師とともに病気を治療する「聴診器怪獣」の「チョウシンキーの長助」。「緑の廊下へようこそ」(p.62)と同じ渡り廊下に展示した。既存の物に未知の怪獣を合わせた作品をつくる作者は、今回は聴診器に着目。その機能を維持しながら、少し怖くも愛嬌のある怪獣の姿に変えた。小児科の医師の協力を得て「聴診器怪獣」を使用している写真も展示。医療者にとって日常的な道具であっても、患者にとっては恐怖や不安を感じることもある医療器具に新たな見方を提示した。

作者コメント

「チョウシンキーの長助」の展示で印象に残っていることは、小児科の福島紘子先生(p.48)にご協力いただき実際に病院で使用している写真を撮影できたことだ。得体の知れない生物の長助が福島先生と写真に収まることによって、医師と協力し病気を治療する仲間のように見えてくる。聴診器を怪獣にするという企画の中で特に不安だった、病院という空間に受け入れてもらえる怪獣になるかという点がこの撮影で解決したように感じた。(澤田 亮)

作者：澤田 亮(さわだ・あきら) | 芸術専門学群総合造形領域3年

展示期間：2022年12月17日～2023年11月14日

担当教員：村上史明〔芸術系助教〕

協力：福島紘子〔小児科医師〕

書の散歩みち

浦山直也／大平香純／高木桜子／田内優梨奈／
本田穂ノ美／宮川嵩広〈書領域学生有志〉



📍 けやき棟 11階 渡り廊下

書の楽しさを伝えたい

入院患者や職員らが利用する廊下で、書領域で学ぶ学生らが毎年有志で展示を企画しているが、本展に合わせて作品を制作した。篆書や行書といった漢字や、日本語を書いた調和体などといった書体、そしてヤギ、ウマ、ウサギ、ニワトリなどの毛や羽を素材とした筆、一人ひとり異なる技法・道具が用いられている。花が咲き乱れる力強さを表現した作品や、晴天にも雨天にも趣があるという意味の「晴好雨奇」を引用し、植物にとっての幸せを表現した作品など、6点が展示された。

作者コメント

書に詳しい方にもそうでない方にも楽しんでもらえるよう、わかりやすい題材にしたり、用具用材を工夫して絵画的に表現したりした。書作品を鑑賞するのが難しいと感じる方も多いが、この展示ではできるだけたくさんの方に書に親しんでもらいたいと考えている。作品を見てくださった患者さんや病院の方々からは、「廊下を通るたびに楽しませてもらっている」「作者のメッセージを読むのが面白い」といったお言葉をいただいた。（宮川嵩広）

作者：浦山直也／大平香純／高木桜子／田内優梨奈／本田穂ノ美／宮川嵩広〈書領域学生有志〉
（うらやま・なおや／おのだいら・かずみ／たかき・さくらこ／たのうち・ゆりな／ほんだ・ほのみ／みやがわ・たかひろ）

展示期間：2023年2月28日～

お久しぶりの病院ゴブリン

小中大地



📍 けやき棟 12階 展望ラウンジ

病院に宿った妖精たち

患者や職員が休憩に利用できる最上階のラウンジが、マスキングテープによる壁画で彩られた。描かれたのは、聴診器や車いすなど病院のなかにあるものに宿った「ゴブリン」たち。2009年、学生時に本院で滞在制作をしたことを機に森羅万象に宿る妖精「ゴブリン」を題材に病院での活動をスタートさせた作者は、2014～20年には小児病棟で定期的なワークショップを行うなど院内各所で活動。本展は約2年ぶりの院内での活動となり、患者や職員とのコミュニケーションから着想を得ながら壁画を増やしていった。

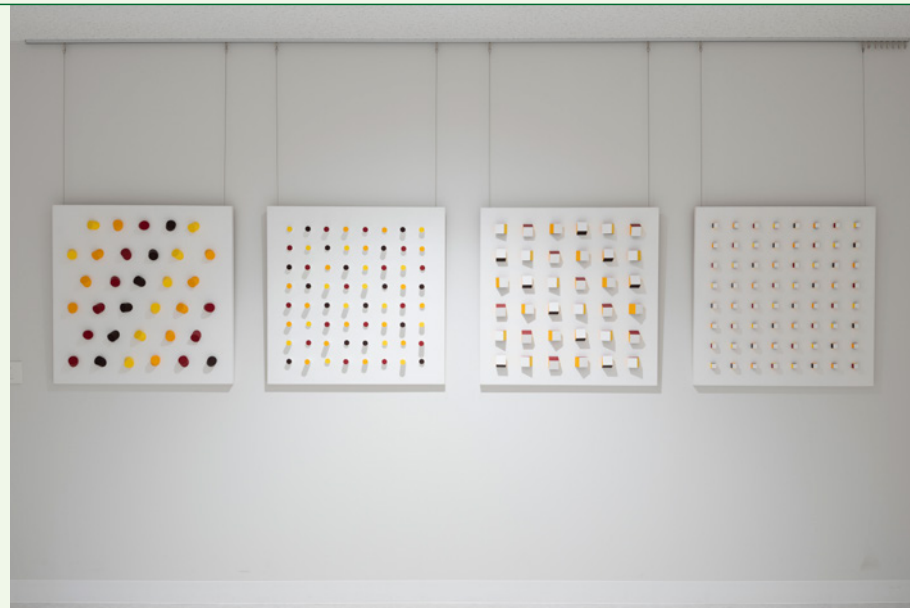
作者コメント

制作中には偶然の再会があった。小児病棟でのワークショップに参加していたご家族や、2009年の最初の滞在制作でお会いしていたという方とも再会できた。新たな出会いもあり、応援の言葉もいただいた。一期一会から通じ合う瞬間には毎回新鮮な喜びがある。また休憩中の職員さんたちへは「お疲れさまです」と想像しながら、ちょうどよい距離感を模索した。コロナ禍を経て、病院へと制作に通う感覚も、やはり「お久しぶり」な時間となった。（小中大地）

作者：小中大地（こなか・だいち） | アーティスト／大学院人間総合科学学術院非常勤講師
展示期間：2022年12月1日～

見る・ミル・変わる

打越結衣



📍 A-C棟 2階 渡り廊下

見る場所で変化を楽しむ

病棟の改修工事に伴い新設された廊下で「Polka-dot (ポルカ・ドット)」というシリーズで制作された4点組の作品を展示した。本シリーズは、色や形を変えた小さな木材を白いパネルに貼ることで、見る角度によってさまざまな表情が楽しめる。木片の配置や形状、色の違いは、数理に基づきながらも実験を繰り返すなかで微調整され、作者自身の感覚が加わっている。この廊下は外来棟と機能検査やりハビリテーションを行う棟を結び、日々の往来も多いがふと立ち止まって作品を見る職員の姿も見られた。

作者コメント

これまで作品の中では無彩色を使うことが多かったが、今回の作品は温かさを感じさせるような配色に挑戦した。人々の往来が盛んな渡り廊下という場所で、視点の変化に着目した作品を展示することは自分にとって良い経験になった。病院はさまざまな背景を持つ方が訪れる場であり、職員のみなさんも含めて、忙しい日常を送っている方も多いと思うが、私の作品がふと視界に入ることによって、その日常から少し離れるような体験をしていただけたら嬉しい。(打越結衣)

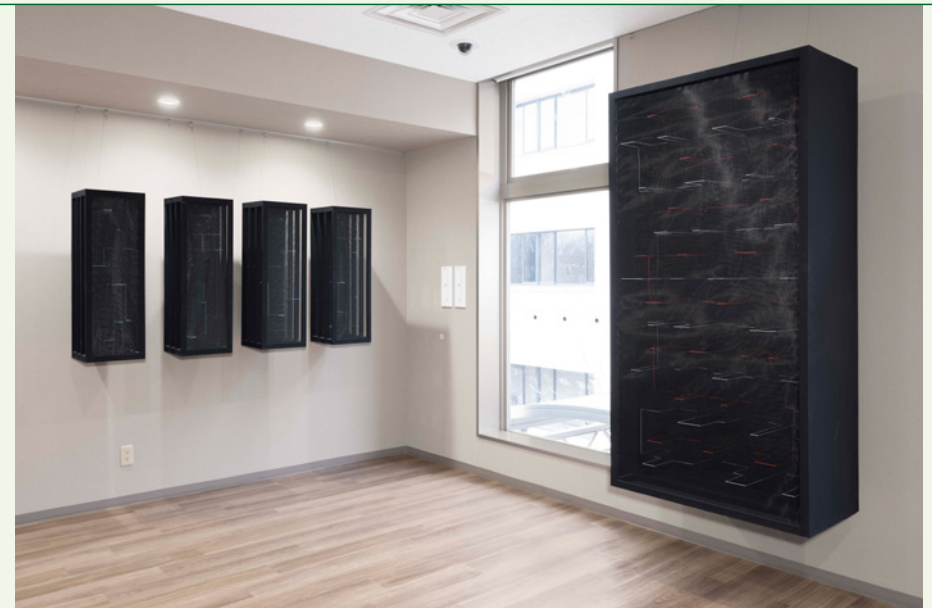
作者：打越結衣 (うちこし・ゆい) | 芸術学学位プログラム構成領域博士前期課程1年

展示期間：2022年7月28日～

担当教員：上浦佑太 [芸術系助教]

アミドとイト

大久保智子



📍 桐の葉モール 2階

網戸を地にして、糸の線を描く

2020年に病院の別棟として新設されたアメニティモールの2階、講堂の入り口に展示されたのは、糸と4枚の網戸でつくられた作品「層」のシリーズ。黒々とした網戸の地に縦横無尽に縫われたカラフルな糸は浮遊しているようにも見えるが、間隔を空けて並べた網戸の間に糸を通してつくられている。青森県出身の作者は幼いころに親しんだ刺し子の経験から糸を通す行為を作品として展開。網戸の目を一つひとつ数え、定規で計測しながら垂直に糸を通して。

作者コメント

「層」の作品は、直線の糸と網戸という二つの要素によって、本来の素材感とは異なる印象を鑑賞者に持たせる。線の要素は、一見針金のように硬い素材に見えたり、発光して見えたりなどさまざまな見え方をするが、実際に近づいて見てみると何の変哲もない糸であることに気が付く。このような見かけ上の質感と、素材本来の質感のギャップに驚きを感じつつ、鑑賞を楽しんでほしいと考え、作品を制作した。(大久保智子)

作者：大久保智子 (おおくぼ・さとこ) | 芸術専門学群構成領域4年

展示期間：2022年7月28日～

担当教員：上浦佑太 [芸術系助教]

洋画野外風景実習 選抜展

「洋画野外風景実習」履修学生有志



📍 A棟1階 廊下

日常に戻りつつある風景

平日、院内でもっとも人通りが多い場所の一つである外来棟で展示したのは、毎年行っている「洋画野外風景実習」の優秀作品展。本展は本院で展示場所を変えながら2012年から例年開催しているが、2020年のコロナ禍で写生合宿が中止となり、身近な風景を描く課題へと変更された。学生が自身で撮影した風景写真やスケッチなどを参考にしながら描いた作品にはコロナ禍でどんな風景に魅せられ、何を表したかったのか、学生の視点や思いが強く反映されている。

教員コメント

今回の展示作品では、学生が自宅で近隣の風景を描いていたコロナ禍1、2年目のころの風景画と比べると、各々が旅行や帰省先で出会った風景を描いた作品が多く、人々が自由に場所を移動できるコロナ前の日常が戻りつつあるのが作品から感じられた。描く場所は学生の自由なので、学生独自の視点や思いが風景画に込められている。2023年度は4年ぶりに風景実習の写生合宿が復活した。次回の展示からはその合宿先の土地の魅力が詰まった風景画を披露したい。（星 美加）

作者：「洋画野外風景実習」履修学生有志

展示期間：2022年12月22日～2023年6月14日

担当教員：星 美加〔芸術系助教〕



アートと医療 ―人間らしさの両輪

森山純子 [水戸芸術館現代美術センター教育プログラムコーディネーター]

水戸芸術館で長年、教育普及事業に従事してきた森山純子氏。
2023年に患者家族として本院に通いました。

自分らしく居られる場所

アートと医療。角度は違うが、どちらも人の尊厳や自由について扱う分野だと考える。誰もがありのままに居られる、その人ならではの表現を尊重する場所は、効率という正義が幅を利かせる社会の中には、意識しないと作れないし、続いていかない。そんな中、筑波大学附属病院では、20年以上前からアートプログラムが院内で盛んに行われてきた。関係者のご尽力はもちろんのこと、医療の現場にアートがあることに、何らかの期待と成果があってはじめてこの継続があると想像する。本書の編集チームにプログラムを始めたきっかけを聞いてみると「生活の場としての病院」というフレーズが返ってきた。急性期の治療だけではなく、一人ひとりが自分らしく生きる場としての病院という視点には、目先の効率化とは逆方向への舵取りがあったと思う。緩効性、遅効性の処方ともいえるのか。

さて、私は長年美術館での仕事で、多くの市民との作品鑑賞、ワークショップやボランティア活動などに関わってきた。その中でアートを通じて多様な価値観に触れ、人とフラットに関わることで、少しずつ心と身体の手元を取り戻した人々を今までたくさん見てきた。この穏やかな回復も、美術館がその人にとって自分らしくありのままに居られる安心な場所であることが大前提だと感じている。

そしてちょうど1年近く前、奇しくも私は一人の患者家族として筑波大学附属病院けやき棟のICUに2カ月近く通った。職業人としての自分と当事者家族としての自分とを相対化して体験を併記することは難しいが、行きつ戻りつ、この間の出来事を記しておこうと思う。

ICUでの日々

けやき棟に患者として入院していたのは私の夫で、入院当時は58歳だった。2023年2月に水戸市の病院を受診し、重篤な皮下の嫌気性菌感染により即入院となった。数日後に市内の総合病院で背中を大きく切開する手術を受け、その後救急医療体制が整った筑波大学附属病院に救急車で搬送された。私も追いかけて病院に入ると、受付近くのエントランスホールに、巨大な木の幹をくり抜いたような天然木が目に入った。機能的で直線的な什器が並ぶフロアの中で、その用途不明で有機的な茶色い塊は圧倒的な存在感を放っていた。そのあと訪れた2階の待合フロアには前から活動を見聞していた「アスパラガス」の活動報告が掲示してあり、何かの展示期間なのかもしれないと思ったが、その時はチラシを探す余裕がなかった。のちに展覧会名が「ボタニカルホスピタル けやきの森にあつまるいのち」といい、その巨木の作品は江崎聖桜さんの作品であることを知った。

夫の容態に戻ると、毎日の外科的処置に加え、24時間の人工透析がはじまり、脳幹の疾患も見つかり、生還の確率は日に日に下がっていった。生存できて



江崎聖桜「SHIN_TAI」(2022年、けやき棟1階入退院センター前)

も四肢麻痺で意思疎通は難しい。そんな絶望的な告知が続いて心が折れそうな中、救われたのは、看護師の皆さんの何気ない対応と言葉だった。搬送されてきた時には既に昏睡状態で横たわっているだけの夫だったのに、「どんなことが好きだったのですか？」など夫の仕事や日常について聞いてくださった。思いがけず彼の人となりについて、話をする事ができた嬉しい時間だった。ナンバリングされた匿名の患者ではなく、そこには確かに夫が彼らしく存在していた。また、昏睡状態にあっても聴覚と臭覚は最後まで働くと聞いたことがあったので、別の日に夫が好きだった細野晴臣の音楽を聞かせたいと担当看護師の方に相談すると、どこからかCDプレーヤーを探してきてくれた。音楽を聞いた夫は、その時、数分だけ目を見開いていた。あとにも先にもこの時だけの出来事だった。聞こえていたのだと思う。そのことが今も私の心を支えてくれている。

音楽を聞いた日の翌日の4月19日。早朝4時半にけやき棟ICUから、夫の血圧が低下してきたと危篤を知らせる電話があった。落ち着けと呟きながら、濃霧で覆われた常磐道を水戸からつくばへと急ぐ。前日、既に私たち家族が選択した緩和治療に入ると担当医から告げられたばかりだった。残された時間は半月なのか1週間なのか。悶々として眠れぬ夜が明けると「その時」はあつという間にやってきた。6時過ぎに病院に到着すると、昨日まで暖かな色をしていた夫の手先、鼻先が、いくらさすっても次第に白くなっていく。大学時代から40年近く、あたりまえのようにそばに居た夫は11時過ぎにずっと逝ってしまった。

夫の臨終のすぐあと、私は県外から駆けつける息子や義母たちの到着を待ちながら、葬儀社を探すために展望ラウンジのある最上階に向かっていた。院内のいたるところに療養中の患者さんとそのご家族が居る中で、葬儀の相談電話をするのは憚られた。

するとラウンジには見覚えのある妖精の一種、「ゴブリン」が居た。優しい色のマスキングテープでできていて、しばし見入った。何日も張り詰めた気持ちでいた私の心のこわばりが和らいでいく。作者の小中大地さんを存じあげていたこともあるが、このちよつとゆるい妖精たちは誰の緊張をもほぐしてくれるような気がした。「ゴブリン」はヨーロッパの民間伝承が由来だが、小中さんの「ゴブリン」は日本の八百万

の神とか付喪神のように、あらゆる場所、モノに存在するユーモラスな妖精だ。

人間らしさをもたらすもの

「ボタニカルホスピタル」展の中では2作品しか確認できなかったが、あとから聞いたところによると、もう少し足を延ばせば、院内にはたくさんの作品が展示されていたようだった。私のような短期に状況が激変した者には全てを見る余裕はなかったが、定期的に来院する方や長期入院の方、医療従事者の方々はまた違った作用があったであろう。

こうして、振りかえてみると医療とともに病院での夫と私たち家族を支えてくれていたのは、隙間に出会った作品、音楽、言葉であった。一見治療には無用と思われるささやかなものや出来事が、実はその人をかたちづくる最も人間らしい部分なのかもしれない。もちろん筑波大学附属病院のカウンセリングチームによる心のケアはとても安心できるものだった。多くのプロフェッショナルに見守られて、家族の大きな試練を乗り越えてきた。

多くの患者が一斉に入口に吸い込まれていく巨大な病院は、さまざまな職種の人々の綿密で専門性を持つ仕事の連動により、一つの生命体のように動いていて、日々多くの患者と家族の病老死に向き合っている。そのことには訪れるたびに驚きと畏怖の念を持って眺めるばかりだった。寸分の隙もないようなこの病院の中のあちこちにひそやかに置かれたアートは、見る人の状況によって時に気づかれたり気づかれなかったりするだろう。しかし、夫を看取った日の私のように誰かの心をそっと支えることが起こり得る。

アートは医療とともに患者や家族を支える人間の尊厳の両輪だ、と言っては大きすぎるのか。

森山純子 [もりやま・じゅんこ]

1965年生まれ。水戸芸術館現代美術センター教育プログラムコーディネーター。1990年同館開館時から教育普及事業に関わり、1997年より現職。ボランティアをはじめとする市民プログラムの運営のほか、「高校生ウィーク」(1993年～)、「視覚に障害がある人との鑑賞ツアー session!」(2008年～)、「こども・こらぼ・らぼ」(2011年～)ほか多様なコミュニティに向けたアクセスプログラムを実施。

筑波大学附属病院のアート＆デザイン年表
2002—2023

- 〔凡例〕
- 各項目は、おもにイベント名・作品名、実施場所、実施者名・作者名の順に記した。
 - 各略号・符号名称については以下のように記した。
◆……筑波大学附属病院のできごと／★……学会、外部発表など／adp……大学を開くアート・デザインプロデュース／
【WS】……ワークショップ／【AIH】……アーティスト・イン・ホスピタル（公募形式の企画）
 - アスバラガスの活動はすべて「大学を開くアート・デザインプロデュース(adp)」の授業の一環として行われている。
 - 各敬称は略した。
 - ①～⑫は、p.16～17の写真に対応した。
 - 2024年1月時点の情報をもとに作成した。

2002年		「.tud(ドットタッド)」発足 (a)
2004年	4月	◆国立大学法人法により、国立大学法人筑波大学の設置
2005年	4月	adpにて「筑波大学附属病院リニューアルプロジェクト」(～2006年3月／担当教員=蓮見孝、貝島桃代)
	8月	「アスバラガス」結成
	12月	【WS】「クリスマスリースづくり」、B棟食堂／B棟、.tud 【WS】「WWW」、A棟1階渡り廊下、アスバラガス ①
2006年	4月	adpにて「筑波大学附属病院リニューアルプロジェクト」(～2007年3月／担当教員=蓮見孝、貝島桃代)
	5月	【展示】「ヒトマイマイのおかもち展」、A棟1階渡り廊下、ヒトマイマイ
	7月	【WS】「七夕飾りづくり」、B棟食堂、.tud
	10月	◆筑波大学附属病院開院30周年
	12月	【WS】「クリスマスリースづくり」、B棟食堂、.tud
2007年	4月	adpにて「ホスピタブル・イン・ホスピタル プロジェクト」(～2008年3月／担当教員=蓮見孝、貝島桃代) 【デザイン】アートステーションSOH完成、A棟1階渡り廊下、アスバラガス
	6月	【WS】「co-more-bi」、アートステーションSOH、アスバラガス ②
2008年	1月	【デザイン】「とび石チェア」、アートステーションSOH、家具デザインチーム
	3月	『アスバラつうしん』創刊、アスバラガス
	4月	adpにて「ホスピタブル・イン・ホスピタル プロジェクト」(～2009年3月／担当教員=蓮見孝、貝島桃代)
	5月	「ADPプロジェクト会議」発足
	6月	家具デザインチームを「バブリカ」という名称に 【WS】「ひよけラゴ」、アートステーションSOH、アスバラガス
	9月	【AIH】「The Long Lunch」(アスバラコンペ企画)、アートステーションSOHほか、小野はるか ③
	11月	【AIH】「病院の村」(アスバラコンペ企画)、アートステーションSOHほか、北澤潤 【展示】「イス誕」、外来エントランス、バブリカ
2009年	1月	【イベント】「SOHフェス」、アートステーションSOH、アスバラガス 【デザイン】「つながる椅子」「ジュリエット」完成／搬入、バブリカ (b)
	2月	【AIH】「オトレール」(アスバラコンペ企画)、アートステーションSOHほか、佐藤史治
	4月	adpにて「ホスピタブル・イン・ホスピタル プロジェクト」(～2010年3月／担当教員=蓮見孝、貝島桃代)
	7月	【WS】「なつのおちょうさん」、アートステーションSOHほか、アスバラガス (c)
	9月	【AIH】「ゴ布林博士の病院ゴ布林」(アスバラレジデンス)、アートステーションSOHほか、小中大地
	12月	【AIH】「目指せ日刊『くまの目』」(アスバラレジデンス)、アートステーションSOHほか、鈴木平人
2010年	4月	adpにて「ホスピタブル・イン・ホスピタル プロジェクト」(～2011年3月／担当教員=蓮見孝、貝島桃代)
	7月	【WS】「てくてくかめかめ」、アートステーションSOH、アスバラガス ④
	12月	【WS・展示】「ホスピタウンのメリークリスマス」、B棟談話室／廊下、アスバラガス
2011年	4月	adpにて「ホスピタブル・イン・ホスピタル プロジェクト」(～2012年3月／担当教員=蓮見孝、貝島桃代)
	7月	【イベント】「夏のおさんぽ会」、院内各所、アスバラガス (d)
	11月	「産科・新生児科・小児科のアート計画ワークショップ」開始(～2012年4月) 【展示】「Graphic Wall」(カメレオンウィンドウ第1弾)、アートステーションSOH、山倉有未／アスバラガス
	12月	【展示】「ある通院作家の1日」(カメレオンウィンドウ第2弾)、アートステーションSOH、寺田幸子／アスバラガス (e) 【イベント】「冬のあったかおさんぽ会」、B棟談話室／廊下、アスバラガス
2012年	1月	「アート・デザインによる筑波大学附属病院の療養環境改善手法の開発プロジェクト芸術系ワーキンググループ(芸術系WG)」発足 ⑤



(a)



(b)



(c)



(d)



(e)

4月	adpにて「アスバラガス」(～2013年3月／担当教員=貝島桃代、内山俊朗、村上史明) 【AIH】「アスバラ・プチデンス」、B棟談話室、学生／アスバラガス
7月	「アート連携部会」設置(～2012年12月)
8月	【WS】カドまるウィーク、アートステーションSOH／B棟 ほか、アスバラガス
10月	【WS】「ゆめ花火WS『ひかりのゆめつぼみ』」、A棟1階受付前、アスバラガス
11月	【イベント】「病院で巨大すごろく大作戦!!」、D棟2階訪問学級前渡り廊下、アスバラガス (f) 【展示】写真作品「つくば、はたらくひと」、けやき棟12階展望ラウンジ／3階術前外来／2階家族控室／1階救急ホール／MRI・CT待合室、学生(以後、2017年まで各年に1度の展示替え)
12月	◆けやき棟(新棟)開設 【展示】「けやきから生まれるいのち」展(～2013年5月) ●筑波実験植物園「四季の写真展」、けやき棟1階、筑波実験植物園×ADP ●三面モニター映像作品、けやき棟1階、西脇慶 ●「けやきに宿る筆墨の心」、けやき棟2・3階、書領域学生 ●風景「春の戸隠」—自然、伊吹、再生—、けやき棟6階、洋画コース学生 ●「つくばの森(空間デザイン計画、掲示板、カーテンのデザイン、グラフィックデザイン)」、小児総合医療センター、情報デザイン／建築デザイン領域学生 ⑥ ●「けやきイレブン」、小児総合医療センター、情報デザイン領域学生 (g)
2013年	1月 ◆茨城県から小児救命救急センター指定 ◆小児総合医療センター、小児集中治療センター設置 「アート・デザインによる筑波大学附属病院の療養環境改善手法の開発プロジェクト(芸術系WG)」から「病院のアートを育てる会議ワーキンググループ」へ 「ADPプロジェクト会議」と「アート連携部会」を統合し「病院のアートを育てる会議」へ 3月 【WS】「ちょうちょむすび」、B棟食堂／けやき棟デイルーム、アスバラガス 【イベント】「医療とアート つながる会議」、筑波大学附属病院ほか、アスバラガス／バブリカ 4月 adpにて「アスバラガス」(～2014年3月／担当教員=貝島桃代、内山俊朗、村上史明) 【展示】「つくばの森」アニメーション上映、けやき棟6階小児総合医療センター、村上史明研究室(以後、2015年まで各年で実施) 6月 【WS】「夜空であそぶ」、小児総合医療センタープレイルーム、田中みさよ 筑波大学附属病院にアートコーディネーター配属 【WS】「いろどりおちょうさんカフェ」、B棟食堂／けやき棟デイルーム、アスバラガス 7月 芸術系にて平成25年度文化庁助成「大学を活用した文化芸術推進事業」開始 9月 【シンポジウム】「日英シンポジウム『CULTURES OF CARE』」、けやき棟1階けやきプラザ、病院のアートを育てる会議／筑波大学芸術系／筑波大学附属病院／ノーフォーク・アンド・ノーリッチ大学附属病院 【展示】小児科にモバイル作品を設置、小児総合医療センター、構成専攻学生 11月 【デザイン】病院ガーデンプロジェクト始動、環境デザイン領域学生 (h)(i) 【WS】「ゆめ花火WS『キラボンをつくろう』」、けやき棟1階外来受付前、アスバラガス 12月 【展示】「けやきから生まれるいのちII —病院のアートの芽」展(～2014年5月) ●三面モニター映像作品、けやき棟1階、村上史明／松村裕沙 ●写真コンテスト優秀作品展、けやき棟1階、筑波実験植物園×ADP (j) ●病院のアート活動記録展、けやきプラザ、筑波大学芸術系 ●「書のプロムナード」展、けやき棟2階、書領域学生 ●風景画「裏磐梯五色沼」展示、けやき棟6階、洋画コース学生 【WS】「ゴ布林博士とクリスマスツリーのかがざりゴ布林をつくろう!!」、小児総合医療センター プレイルーム、小中大地 【WS】「まちなみを描こう」、B棟7階精神神経科、アスバラガス 【イベント】附属病院ジャズコンサート、けやき棟1階受付前、島裕介／齊藤純一／アートコーディネーターほか
2014年	1月 【シンポジウム】「病院のアートを育てるために」、けやき棟1階けやきプラザ、病院のアートを育てる会議／筑波大学芸術系／筑波大学附属病院 2月 【WS】「コップタウンをつくろう」、B棟7階精神神経科、アスバラガス 3月 【WS】「小児病棟ゴ布林ワークショップ」開始、小児総合医療センター、小中大地 4月 adpにて「アスバラガス」(～2015年3月／担当教員=貝島桃代) 【デザイン】けやき棟5階誘導案内の整備、木村浩研究室 【イベント】病院前ガーデンが完成し「ガーデンオープニング」を実施、病院前ガーデン／医学食堂、環境デザイン領域学生 5月 【WS】「アスバラともうがえ」、アートステーションSOH、アスバラガス (k) 7月 【WS】「はなさかうちわ」、けやき棟食堂／デイルーム、アスバラガス 【WS】小児科でのアニメーションワークショップ、けやき棟6階小児総合医療センター、村上史明研究室(以後、2015年まで各年で実施) 【展示】「洋画野外風景実習作品展」、けやき棟6階渡り廊下、洋画野外風景実習履修生(以後、各年に2度の展示替え) (l)



(f)



(g)



(h)



(i)



(j)

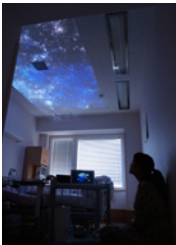


(k)

2015 年	8 月	【展示】豚の立体作品「暖」の設置、病院前ガーデン、小野裕子 ⑦
	9 月	【展示】「書領域学生による作品展」、けやき棟2階渡り廊下、書領域学生(以後、各年に1度の展示替え)
	10 月	【イベント】「秋のガーデンカフェ」、病院前ガーデン、環境デザイン領域学生
	11 月	【WS】「ゆめ花火WS『はなさかとけい』」、けやき棟1階受付前、アスバラガス 【展示・デザイン】「世界糖尿病デー」イベント告知映像およびオリジナルキャラクターの制作／会場演出、けやき棟1階三面モニターほか、村上史明研究室(以後、2018年まで定期的に実施)
	1 月	「輪唱の○」(AIR)、けやき棟1階／リハビリテーション部、つちやあゆみ
	2 月	【AIH】「光の出張便」、けやき棟／B棟、堀真実 (m) 【展示】壁画制作、B棟1階外来患者用多目的室、齊藤明美／中村菜月 【WS】「ま□(しかく)ファーム」、B棟7階精神神経科、小野裕子／アスバラガス 【展示】「ガーデンズー」、病院前ガーデン、学生
	4 月	adpにて「アスバラガス」(～2016年3月／担当教員=貝島桃代) 院内のアート・デザイン関連ポストカードを実験的に制作・配布、各病棟／アートステーションSOH／エントランスホール、アートコーディネーター
	6 月	院内広報誌『HOSPITAL ART』(2016年9月より『いきいきホスピタルにゅーす』)創刊・配布、院内各所、アートコーディネーター(以後、定期的に発行)
	7 月	【AIH】「Animal×Life ーきりんのフレディ、うさぎのマーシー、ねこのトム」(WS・展示)、けやき棟1階入退院センター前、飯田瑠璃子 (n) 【WS】「ひまわり畑のおちようさん」、けやき棟デイルーム、アスバラガス
2016 年	9 月	【デザイン】「患者図書展『桐の葉文庫』」が完成しオープニングセレモニーを開催、建築デザイン領域学生(デザイン)／洋画領域学生(壁画制作) ⑧ 【WS】「ゆめ花火WS『さらきらおさんぼ』」、けやき棟1階受付前、アスバラガス
	11 月	【イベント】「ホスピタルツアー」を開催(「いきいきホスピタルレポート展開連企画として」)、筑波大学附属病院／筑波メディカルセンター病院 (o) 【イベント】「Garden Café ～ガーデンの秋を見つけよう～」、病院前ガーデン、環境デザイン領域学生
	12 月	【WS・展示】「クリスマスポケット」、B棟8階西／10階東病棟、アスバラガス
	4 月	adpにて「アスバラガス」(～2017年3月／担当教員=貝島桃代)
	7 月	【展示】「植物画コンクール展『選抜』展」、けやき棟1階ホスピタルモール、筑波実験植物園×ぶらんだ(adp) 【WS】「夏のおちようさん」、B棟601・603病棟、アスバラガス
	10 月	◆筑波大学附属病院開院40周年 ◆つくば予防医学研究センター設置 筑波大学附属病院開院40周年記念ロゴ制作、小中大地 【展示】「筑波実験植物園写真展『色々なキノコ』」、けやき棟1階ホスピタルモール、筑波実験植物園×ぶらんだ(adp) 【デザイン】窓ガラスへの装飾、アートステーションSOH、アスバラガス
	11 月	【展示】「ゴブリングプロジェクト展～みんなと一緒に生みだすアート～」、A棟1～3階廊下ほか、小中大地
	12 月	【WS】「Twinkle Bon Bon～My little holy night～」、けやき棟7階西病棟デイルーム、アスバラガス アート作品展示および病院アート専用掲示板の設置、A棟1・2階廊下、病院のアートを育てる会議 【WS】「気持ちゴ布林をつくろう!」、けやき棟1階受付前、小中大地 (p)
	1 月	【展示】「筑波実験植物園写真展『野菜のクイズ』」、けやき棟1階ホスピタルモール、筑波実験植物園×ぶらんだ(adp) 【展示】「日本画野外風景画実習写生作品展」、けやき棟3階渡り廊下、日本画領域学生
2017 年	3 月	【展示】「Twinkle Bon Bon～My little holy night～」、アートステーションSOH、アスバラガス 【イベント】病院ガーデン花植えイベント、病院前ガーデン、芸術系教員・学生／園芸クラブ 筑波大学園芸クラブが芸術系教員・学生から病院ガーデンの運用を引き継ぐ
	4 月	adpにて「アスバラガス」(～2018年3月／担当教員=貝島桃代)
	6 月	【展示】「筑波実験植物園写真展『野菜のクイズ』」、A棟1・2階廊下、筑波実験植物園×ぶらんだ(adp)
	7 月	NP0法人チア・アートが発足し、アートコーディネート業務の一部を担う 【展示】「アスバラガスの今までとこれから」展、A棟1・2階、アートコーディネーター 【WS】「まど百景」、けやき棟6階東病棟、アスバラガス
	11 月	【AIH】アーティスト・イン・ホスピタル2017「光を紡ぐ」、A棟1・2階廊下(展示)／けやき棟11階東・西病棟／けやき棟1階エレベーターホール(WS)、諏訪春佳 (q)
	1 月	【展示】参加型展示「どんつきまど」設置、けやき棟6東病棟、アスバラガス 【展示】筑波実験植物園過去作品展示第2弾「春の実験植物園」展、A棟1・2階、筑波実験植物園×ぶらんだ(adp) 【展示】立体アート作品展示、病院前ガーデン、現代アート表現演習履修生
	4 月	adpにて「アスバラガス」(～2019年3月／担当教員=貝島桃代) 【展示】「糖尿病解説アニメーション」「みんなで踊ろうぐるぐるダンス」「めろめろみみちゃん」「つくば名作ファンタジーかきじぞう」、けやき棟1階三面モニター、学生有志ほか 【展示】「ドリームポートレートシリーズ」、ホスピタルモール、造形技法実習履修生



(l)



(m)



(n)



(o)



(p)



(q)

2019 年		【シンポジウム】「アートでつくる病院のミライ」、けやき棟1階けやきプラザ、チア・アート／筑波大学芸術系／筑波大学附属病院／筑波メディカルセンター病院 ⑨ 【展示】「2017・2018 年度 平面構成展」、外来棟1・2階、構成領域学生
	7 月	活動報告集「アスバラガス 2017」発行・配布、院内各所、アスバラガス
	10 月	【WS】「まど百景」、けやき棟6東病棟、アスバラガス
	12 月	【展示】構成領域学生による作品展、けやき棟5階西病棟、構成領域学生
	4 月	adpにて「アスバラガス」(～2020年3月／担当教員=貝島桃代) 【展示】立体アート作品展示、病院前ガーデン、現代アート表現演習履修生
	5 月	【展示】構成領域学生による作品展、A棟2階廊下／けやき棟5階西病棟、構成領域学生
	7 月	【展示】笠原浩美作品展、A棟1・2階、笠原浩美 ⑩
	9 月	【展示】洋画領域によるテンペラ画作品展、けやき棟3階渡り廊下、西洋美術技法演習履修生
	10 月	【展示】「かたちあそび展 素材や組み立て方の工夫による『かたちの作り方』の研究」、A棟1・2階廊下、構成領域学生 (r)
2020 年	11 月	★アートミーツケア学会実践報告「病院アートコーディネーターの視点から見たアート活動の実践と展開について～筑波大学附属病院での事例から～」、アートミーツケア学会2019年度総会・大会、渡邊のり子
	12 月	【展示】構成領域学生による作品展、けやき棟5階西病棟、さようさあや
	1 月	【展示】「アスリートの笑顔展」、A棟1・2階廊下、須藤ゆみ (s)
	4 月	adpにて「アスバラガス」(～2021年3月／担当教員=貝島桃代) 『グレッシーマンガ』発行、筑波大学グレッシーコラボレーションズ 【展示】壁画装飾、B棟501病棟、アートコーディネーター
	5 月	【WS】工作の手順や材料を掲載した『みんなで作ろう!ゴ布林だいたいレシビ2』配布および公開、小児総合医療センターほか、小中大地 (t)
	7 月	【展示】桐の葉モールオープン記念「かわるいとなみ展」、桐の葉モール2階、さようさあや
	9 月	『アスバラガス通信』復刊・配布、院内各所、アスバラガス(以後、定期的に発行)
	11 月	★アートミーツケア学会トークイベント「コロナ禍で実践される病院のアート・プロジェクト」登壇、アートミーツケア学会2020年度総会・大会フリンジ企画(オンライン)、原晃／佐藤恵美／松崎仰生
	12 月	【展示】「洋画野外風景実習作品展」(新型コロナウイルスの影響による合宿中止のため、学生の身近な風景をモチーフに制作)、けやき棟3階廊下／A棟1階廊下ほか、洋画野外風景画実習履修生(～2023年6月)
2021 年	4 月	adpにて「アスバラガス」(～2022年3月／担当教員=貝島桃代)
	6 月	【展示】「ふくらみ」展、桐の葉モール2階、海邊可奈子 (u)
	7 月	【デザイン】予防医学研究センターマスコットキャラクター「Tドックくん」完成、予防医学研究センター、島田千聖
	8 月	『グレッシーマンガ2』発行、筑波大学グレッシーコラボレーションズ
	10 月	【WS】対話型鑑賞体験会の実施、病院のアートを育てる会議有志(対面・オンライン)、森永康平 ⑪
	11 月	「ハロウィンゴ布林」と関連したゴ布林博士からの「おてがみ」の送付、小児総合医療センター、小中大地
	2 月	【展示】「すがお絵の木」、アートステーションSOH、アスバラガス
	3 月	【WS】院内展示作品を用いた対話型鑑賞体験会の実施、緩和ケア委員会有志(オンライン)、森永康平
	4 月	adpにて「アスバラガス」(～2023年3月／担当教員=小中大地)
2022 年	5 月	病院のアート&デザイン活動を紹介するウェブページの公開、筑波大学附属病院ウェブサイト、アートコーディネーター
	7 月	【展示】造形ラガ展Vol.1「見る・ミル・変わる」、A-C棟1階渡り廊下、打越結衣 【展示】造形ラガ展Vol.2「アミドとイト」、桐の葉モール2階、大久保智子 【展示】「ボタニカルホスピタル けやきの森にあつまるいのち」展 (v) ●「緑の廊下へようこそ」、けやき棟2階渡り廊下、彫塑領域学生(2022年11月～2023年11月) ●「お久しぶりの病院ゴ布林」、けやき棟12階展望ラウンジ、小中大地(2022年12月～) ●「SHIN_TAI」、けやき棟1階入退院センター前、江崎聖桜(2022年12月～2023年12月) ●「小さな動物園」、病院前ガーデン、立体加工基礎演習履修生(2022年12月～2023年3月) ●「西洋画技法実習Ⅱ『テンペラ技法』作品展」、けやき棟1階ホスピタルモール、西洋画技法実習履修生(2023年2月～) ●「書の散歩みち」、けやき棟11階渡り廊下、書領域学生(2023年2月～2024年1月) ●「成長記録 アスバラガス、咲く かがやく。」、アートステーションSOH、アスバラガス(2023年3月～) ●「怪獣医療」、けやき棟2階渡り廊下、澤田亮(2023年3月～2023年11月)
	12 月	【シンポジウム】けやき棟開設10周年記念アートプロジェクト「医療現場におけるアート&デザインの力」、桐の葉モール講堂、筑波大学附属病院／筑波大学芸術系／チア・アート ⑫
	4 月	adpにて「アスバラガス」(～2024年3月／担当教員=小中大地)
	8 月	【WS】工作キット「くるりんつむりん」配布、小児総合医療センター、アスバラガス
	9 月	「病院のアートを育てる会議」にてこれからの病院のアート&デザインに関する検討会を開始 (w)
	11 月	【展示】「ぬくもりの窓辺」、けやき棟2階渡り廊下、彫塑領域学生



(r)



(s)



(t)



(u)



(v)



(w)



Humanityを原点に

本書の出版に関わってきた芸術系教員の一人として、とてもうれしく、かつありがたく思っております。本書の出版にご尽力くださった皆様に心よりお礼申し上げます。

芸術関連組織（芸術系、芸術専門学群、大学院）と附属病院の協働は2002年に始められました。初期の代表的なプロジェクトは「大学を開くアート・デザインプロデュース（adp）」という授業の一環として行われ、附属病院内の渡り廊下を改修し、「アートステーション SOH (Seeds of Humanity)」という名の活動拠点をつくるというものでした。

それ以降、この協働は医療従事者の皆様、患者さん、アーティスト、学生、文化庁、関連する企業の皆様、大学教職員など多くの方々にご参加いただき、支えられながら、より大きな活動へと成長して参りました。学生は協働を通じて多様なものの見方、オープンなマインド、アートと社会の連続性などを学び、卒業後は幅広い分野で活躍しています。また、それぞれの立場から、アートのあり方、病院のあり方について議論を重ね、新たなアートと病院の姿を描き出して参りました。

これまでの約20年の活動を振り返りますと、医療現場におけるアート＆デザイン活動を「Humanity」を原点に進められたのはとてもよいことであり、正しいことだったと思います。アートが患者さんの不安を和らげたり、治療の理解を促進したり、回復を早めたりするという科学的なエビデンスを蓄積していくことももちろん重要ですが、直接的には治療に関与しないアートは病院に不要なのかというと決してそんなことはありません。誰でも、いかなるときでも、アートに囲まれた豊かな生活を送れるかどうかは人の道、人間の尊厳に関わる重大な問題です。

今後もさらに熱い気持ちでこの活動を維持、発展させていくとともに、学術的な成果としてまとめ、社会に還元して参ります。今後も引き続き多くの皆様にご指導、ご参加、ご協力いただけますことを祈念いたします。

小山慎一

筑波大学芸術系教授／病院のアートを育てる会議ワーキンググループリーダー



おわりに

病院のアートはチケットを購入して鑑賞する美術館のアートとは少し性質が違います。多くの場合、心も体も弱っている患者さんが思いがけずに出会うアートです。患者さんは快復される方ばかりではありません。しかしその作品にふと出会ったとき、心が癒されたり、病気の辛さを一瞬忘れたり、病気を克服しようとする力が奮い立たされたり……。それが病院のアートが持つ独自性ではないでしょうか。

本院のアートの歴史を振り返ってみると、たくさんのアートがこれまで病院を彩ってくれました。「Animal × Life ―きりんのフレディ、うさぎのマーシー、ねこのトム」(2015年、p.39)では、大きなきりんのフレディと仲間たちが外来エントランスに座り、外来患者さんを迎えてくれました。フレディを見上げる子どもたちのキラキラした笑顔は今も忘れられません。「なつのおちょうさん」(2009年、p.24)では、入院患者さんや看護師たちの胸に色とりどりの蝶々たちが舞っていました。写真作品展「つくば、はたらくひと」(2014年)では、ロボットのベッパークンが「ひと」として被写体となり筑波研究学園都市らしいユーモラスさを感じました。また、ゴブリン博士(小中大地さん)の「ゴブリン」は10年以上も前から病院に住みつき、今でも12階のラウンジで新しいゴブリン仲間と共に遊んでいるのです。

これらのたくさんの作品、ワークショップやプロジェクトは、患者さんや病院職員を楽しませ、元気をくれました。けやき棟開設から10年が経ち、今ではアートは日常の風景になりつつあります。

筑波大学附属病院のアートは、これからも病院という非日常的な空間をさまざまな色やカタチで色とりどりに照らし、患者さんや病院職員の心にほっこりと花を咲かせてくれることでしょう。そんな温かで優しい病院のアートが未来へ続くことを願ってご挨拶の言葉とさせていただきます。

篠崎まゆみ
筑波大学附属病院副病院長／看護部長

〔写真〕

p.2～4／付属シール：けやき棟外観、p.6：けやき棟 1 階正面玄関付近、p.8：けやき棟 2 階渡り廊下より、
p.9：けやき棟 12 階展望ラウンジ屋外デッキ、p.10：けやき棟 2 階渡り廊下、p.11／付属シール：けやき棟 6 階小児総合医療センター入口、
p.55：アートステーション SOH、p.69／付属シール：けやき棟 12 階展望ラウンジ、p.76：B 棟 2 階廊下より、p.78：けやき棟 1 階中庭

けやき棟開設 10 周年記念
筑波大学附属病院 アート＆デザインの歩み

2024 年 3 月 31 日発行

発行 ＝ 国立大学法人筑波大学附属病院
〒305-8576 茨城県つくば市天久保 2 丁目 1 番地 1
TEL. 029-853-3900（病院代表）
<https://www.hosp.tsukuba.ac.jp/>

企画・監修 ＝ 病院のアートを育てる会議

著者 ＝ 原 晃、篠崎まゆみ、福島紘子、岩淵 敦、新田智弘、松崎仰生〔筑波大学附属病院〕／
野中勝利、小山慎一、村上史明〔筑波大学芸術系〕／岩田祐佳梨〔チア・アート〕／五十嵐徹也／
白川洋子〔茨城県看護協会〕／三ヶ田愛子〔関東信越厚生局茨城事務所〕／蓮見 孝／
齊藤泰嘉〔常磐大学〕／貝島桃代〔スイス連邦工科大学〕／小中大地〔アーティスト〕／
大政 愛〔はじまりの美術館〕／森山純子〔水戸芸術館〕

編集 ＝ 佐藤恵美／新田智弘、松崎仰生〔筑波大学附属病院総務部整備推進課〕／
岩田祐佳梨、樫村宙子〔チア・アート〕

構成 ＝ 彌田円賀（p.20～25）／坂本のどか（p.29～34）／樫村宙子（p.41～47）／佐藤恵美（p.26～28、p.52～54）

デザイン ＝ 星野哲也

写真 ＝ 小野奈那子（p.2～4、6、8～11、55、69、76、78、付属シール）／
中川 周（p.17-②、p.18、p.20、p.22、p.29 上、p.41、p.56、p.58 右上／右下、
p.59、p.60 左、p.61～62、p.63 左、p.64～68、p.70、p.75-v）

協力 ＝ 国立大学法人筑波大学芸術系／NPO 法人チア・アート

印刷・製本 ＝ 株式会社イニユニック

ISBN 978-4-910114-50-7
Copyright ©University of Tsukuba Hospital, 2024
All Rights Reserved

Printed in Japan

